

県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

三谷中原遺跡

2019.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、県道中徳三谷高松線建設事業に伴い平成13・14年度に発掘調査を実施した、香川県高松市三谷町中原に所在する三谷中原遺跡（みたになかはらいせき）の報告を収録しています。

発掘調査は、歴史地理学の研究成果により現在の県道三本國分寺線のやや北側に東西方向に敷設されたとされる古代南海道推定地を含む幅25m、南北延長180mの範囲について実施しました。調査の結果、道路側溝のある古代の溝は存在しましたが、後世の土地開発による削平が著しく、古代官道に関わる明確な証拠を検出するには至りませんでした。しかしながら、土壤の堆積や削平の歴史、周辺地形との関係、そして出土品を詳細に調査し、周辺の土地開発の歴史や県内の道路関係遺構を精査することにより、少しでも古代官道の存在の可能性について研究する材料を提供することができたものと考えております。

発掘調査終了後、本報告書刊行までに長時間が経過しましたが、この成果が本県の歴史研究の資料として今後広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、県土木部道路課並びに関係各機関・地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財保護行政並びに当センターへのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年3月15日

香川県埋蔵文化財センター

所長 西岡 達哉

例　言

1. 本書は、県道中徳三谷高松線建設事業に伴い平成 13 年度と平成 14 年度に実施した三谷中原遺跡（みたになかはら いせき）の発掘調査の本報告である。
2. 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、発掘調査は平成 13 年度と平成 14 年度に当時の財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（現在、解散）に委託して実施し、整理作業は平成 29 年度に香川県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

平成 13 年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 北原和利、課長補佐 小国史郎

総務 副主幹 中村楨伸、主査 須崎陽子、主事 亀田幸一

文化財 副主幹 大山眞充、主任 西岡達哉、文化財専門員 古野徳久・宮崎哲治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 小原克己、次長 川原裕章

総務 参事 河野浩征、副主幹 大西誠治、係長 多田敏弘、主査 山本和代

調査 参事 梅木正信、主任文化財専門員 廣瀬常雄・藤好史郎

調査担当 文化財専門員 川原和生、主任技師 長井博志、調査技術員 武井美和

平成 14 年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 北原和利、課長補佐 渡邊勇人

総務 主任 香川浩章 主事 亀田幸一

文化財 副主幹 大山真充、文化財専門員 片桐孝浩・古野徳久・佐藤竜馬

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 小原克己、次長 渡部明夫

総務 参事 河野浩征、副主幹 野保昌弘、係長 多田敏弘、主査 山本和代

調査 参事 梅木正信、主任文化財専門員 藤好史郎

調査担当 文化財専門員 森下友子、主任技師 小林明弘、調査技術員 加納裕之・武井美和

平成 29 年度 整理

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳 和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 信里芳紀・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 増田 宏 次長 森 格也

資料普及課 課長 古野徳久

整理担当 主任文化財専門員 森下英治

4. 本書は第4章については受託者による分析等成果原稿を掲載したほかは、執筆及び全体編集を森下英治が担当した。

5. 調査、整理にあたって、次の機関や方々に協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)

香川県土木部道路課、地元各自治会、地元各水利組合、高松市教育委員会

6. 調査時に使用した遺構略号は、次のとおりである。

SH 堅穴建物 SP 柱穴 SK 土坑 SD 溝 SR 河川

SX 性格不明遺構

なお、調査時に付与した遺構略号は当該報告においても変更していないので、当該報告で確定した遺構の性格と遺構略号が一致しないものもある。

7. 掛図に国土地理院数値地図 25000（地図画像）徳島・岡山及び丸亀、同数値地図 25000（土地条件）、高松市発行都市計画図を使用した。

8. 本書で使用している座標は調査時に使用した国土座標系日本測地系第IV系を踏襲している。

9. 本書に掲載した写真は第4章を除き、調査担当者が撮影したものである。

10. 土層断面図における土色の一部は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に従って表示した。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調査成果	
第1節 調査地区割及び層序.....	8
第2節 遺構・遺物.....	32
第4章 自然科学的分析	
第1節 樹種同定.....	75
第5章 総括	
第1節 複数の調査区にまたがる遺構の整理.....	78
第2節 周辺微地形と溝の水利環境上の位置.....	83
第3節 古代南海道遺構としての位置づけ.....	85
第4節 まとめ.....	100

挿図目次

第1図 調査位置図	1
第2図 高松平野南部の土地条件図	2
第3図 周辺遺跡分布図	4
第4図 調査地区割図	8
第5図 全体平面図及び縮小断面図	9
第6図 I区調査区縦面断面図 (1)	12
第7図 I区調査区縦面断面図 (2)	13
第8図 II区調査区縦面断面図	14
第9図 III区調査区縦面断面図 (1) 西壁	15
第10図 III区調査区縦面断面図 (2) 東壁	16
第11図 III区調査区縦面断面図 (3) 東西断面	17
第12図 IV区調査区縦面断面図	18
第13図 V区調査区縦面断面図	19
第14図 VI区調査区縦面断面図	20
第15図 VII区調査区縦面断面図 (1)	21
第16図 VII区調査区縦面断面図 (2)	22
第17図 VII区調査区縦面断面図 (1)	23
第18図 VII区調査区縦面断面図 (2)	24
第19図 VII区調査区縦面断面図 (3)	25
第20図 VII区調査区縦面断面図 (4)	26
第21図 VII区調査区縦面断面図 (5) 中央トレンチ	27
第22図 IX区調査区縦面断面図 (1) 東壁1	28
第23図 IX区調査区縦面断面図 (2) 東壁2	29
第24図 IX区調査区縦面断面図 (3) 西壁1	30
第25図 IX区調査区縦面断面図 (4) 西壁2	31
第26図 IX区調査区縦面断面図 (5) 南壁	32
第27図 VII区 SH01 平・断面図、出土遺物実測図	33
第28図 I区 SK01 平・断面図	33
第29図 III区 SK01 平・断面図、出土遺物実測図	34
第30図 IV区 SK01 平・断面図	34
第31図 V区 SK01-04 平・断面図	35
第32図 VI区 SK01-01 平・断面図	36
第33図 VI区 SK08 平・断面図、出土遺物実測図	37
第34図 VII区 SK01 平・断面図	38
第35図 VII区 SK02 平・断面図、出土遺物実測図 1	39
第36図 VII区 SK02 出土遺物実測図 2	40
第37図 VII区 SK02 出土遺物実測図 3	41
第38図 VII区 SK02 出土遺物実測図 4	42
第39図 IX区 SK02 平・断面図	43
第40図 I区 SD01-07 断面図、出土遺物実測図	45
第41図 III区 SD05-08 断面図	46
第42図 III区 SD05-07 出土遺物実測図	47
第43図 III区 SD09-11-19 断面図	48
第44図 IV・V区 SD01-02 断面図	49
第45図 IV・V区 SD01-02 出土遺物実測図	50
第46図 IV区 SD03_17 断面図、出土遺物実測図	52
第47図 VI区 SD02-04・06・09・10・11 断面図、 出土遺物実測図	53
第48図 VII区 SD01・02 断面図、出土遺物実測図	54
第49図 VII区 SD01・02・03・04・VI区 SD01 断面図、 出土遺物実測図	55
第50図 VII区 SD12 断面図、出土遺物実測図	56
第51図 VII区 SD07・13・14・16・18・20・22 断面図	57
第52図 VII区 SX04・IX区 SX05 平・断面図、 出土遺物実測図	58
第53図 河川路路流分区図	59
第54図 VII区 SR01 出土遺物実測図 1	60
第55図 VII区 SR02 出土遺物実測図 2	61
第56図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図 1	62
第57図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図 2	63
第58図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図 3	64
第59図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図 4	65
第60図 VII区 SR01 出土遺物実測図 1	66
第61図 VII区 SR01 出土遺物実測図 2	67
第62図 VII区 SR01 出土遺物実測図 3	68
第63図 VII区 SR02 出土遺物実測図 1	69
第64図 VII区 SR02 出土遺物実測図 2	70
第65図 VII区 SR02 出土遺物実測図 3	71
第66図 VII区 SR02 出土遺物実測図 4	72
第67図 VIII区 SR03 出土遺物実測図	73
第68図 包含層出土遺物実測図	74
第69図 出土木製品の光学顕微鏡写真	77
第70図 三谷中原遺跡周辺変遷図	79
第71図 三谷中原遺跡周辺の微地形及び条里開連 造構等分布図	82
第72図 高松市調査南海道推定地調査区の概要	87
第73図 沢井遺跡（東かがわ市）道路遺構分布図	90
第74図 川原遺跡（高松市）道路遺構分布図	90
第75図 岸の上遺跡（丸亀市）道路遺構等分布図	91
第76図 四国学院大学構内遺跡道路遺構分布図	92
第77図 仲村麻寺跡道路遺構分布図	94
第78図 旧練兵場遺跡道路遺構分布図 (1)	95
第79図 旧練兵場遺跡道路遺構分布図 (2)	96
第80図 旧練兵場遺跡道路遺構分布図 (3)	97
第81図 東坂元三の石遺跡（丸亀市） 道路遺構分布図	98

付図 三谷中原遺跡全体図 (1/200)

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
第2表 出土木製品の樹種同定結果一覧	75
第3表 三谷中原遺跡出土土器観察表	103
第4表 三谷中原遺跡出土木器観察表	119
第5表 三谷中原遺跡出土石器観察表	119

第1章 調査に至る経緯と経過

高松平野南部に位置していた高松空港が平成元年に南部の同市香南町の山間に移転した後の広大な跡地の有効活用のため、県は翌年度から「技術・情報・文化の複合拠点」インテリジェントパークとして整備を進め、あわせて利便性を高めるため東西南北へ県道の拡幅・新設を並行して行った。県道中徳三谷高松線のうちインテリジェントパークから南に新設されたルートは、用地内の埋蔵文化財の保護について、県高松土木事務所と県教育委員会事務局文化行政課(現在「生涯学習・文化財課」、以下「県教委」という)との間で協議が進められ、平成10年度から県教委が試掘調査を実施して「上林遺跡」「北野遺跡」「鎌野西遺跡」「三谷中原遺跡」の所在を確認、順次財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して本発掘調査を実施した。

三谷中原遺跡はインテリジェントパークから県道三木国分寺線まで南に延びる新設路線のうち最も南に位置し、平成13年度に2,180m²、平成14年度に2,404m²の調査を直営で実施した。出土遺物は土器等で28リットル入りコンテナで62箱分である。

本発掘調査終了後、長期が経過したが、平成23年度に県教委と県土木部道路課との間で県道関係遺跡の整理作業を計画的に実施する旨の協議が整い、平成29年度に三谷中原遺跡の整理作業を実施し、本報告書は翌30年度に印刷を行った。



第1図 調査地位置図

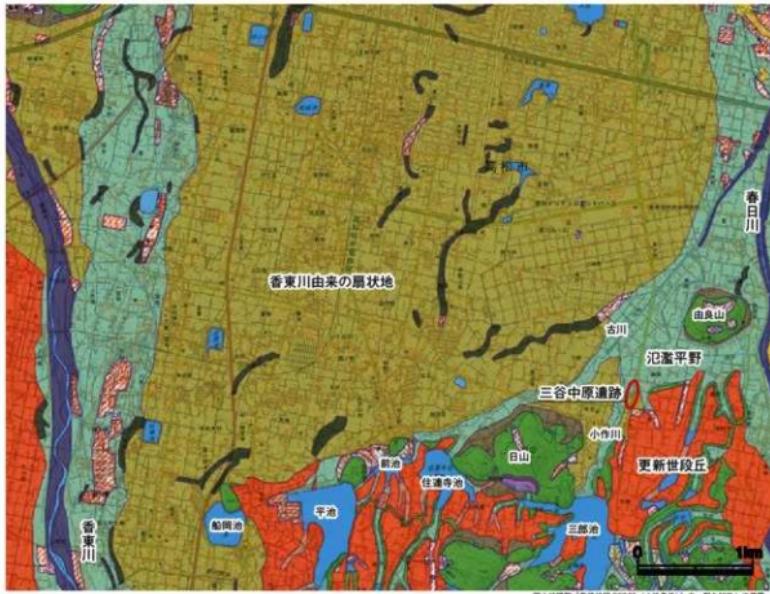
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

香川県は四国東北部の瀬戸内海沿岸地域にある。県の平面形はおよそ半月形を呈し、南に標高800～1,000mの讃岐山脈が連なり、北に讃岐平野が展開する。河川は讃岐山脈に源を発し、北流して瀬戸内海に注ぐ。面積は全国最小（1,876km²）で、平地と山地は相半ばする。北は瀬戸内海を挟み、岡山県と接し、東及び南は徳島県、西は愛媛県に接する。瀬戸内海に面する海岸線は延長約724kmあり、面積の割に海岸線が長いのが特徴である。気候は四季を通じて温暖で、災害も少ない温かな土地柄である。

讃岐山脈は中生代白亜紀に生成された領家帯花崗岩及びその上部に堆積した和泉帯砂岩を基盤とし、その北には新生代新第三紀中新世に活動した瀬戸内火山帯によって生成された凝灰岩や安山岩等の火山性岩石を山上に冠する円錐形（ビュート）や台地状（メサ）といった山塊が点在する。円錐形の山塊は讃岐富士と呼ばれる飯野山（丸亀市）、台地状の山塊は源平合戦で著名な屋島など、特徴的な山塊が点在する。山間を縫って流下する中小河川は更新世から完新世にかけて多量の土砂をもたらし、埋没谷を埋め尽くし現在の扇状地平野を生成した。

讃岐平野と総称される平野は、西から三豊平野、丸亀平野、高松平野に細分できる。いずれの平野もそのような扇状地が発達する点で共通し、更新世末期以後の生活痕跡が地表面下の比較的浅い位置で確認できる。高松平野は高松市南部の香川町付近から扇状に広がる香東川が形成した扇状地がもっとも大



第2図 高松平野南部の土地条件図

きく、南西から北東に向かっての支流や埋没河川が数多く流下する。その自然地形の凹凸を利用して人々の営みが展開した。

三谷中原遺跡は香東川より東側の扇状地帯南縁、標高 21 ~ 23 m 地点に立地する。遺跡の南には瘤山（116 m）、日山（192 m）などの独立性の低丘陵が北東方向に小尾根を延ばし、その先端部に取り付く高位段丘が遺跡背後の間際にまで迫る。日山の南に所在する三郎池はそのような丘陵間の谷水を堰き止めた巨大な谷池で、吐水は小作川として流下する。西方の住蓮寺池や前池付近にも同様の谷水が流下し、それらが合流して北東方向に古川として流下し、さらに春日川に合流する。小作川と古川合流点は遺跡から約 600 m 北西にあり、そこから下流域は氾濫平野（沖積低地）となる。

以上のように当遺跡は高松平野南部の扇状地側面末端部に位置し、遺跡の基盤に更新世末期から完新世にかけての埋没した開析谷や旧河道が複雑に重複しながら存在するといった地形・地質環境にあった。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

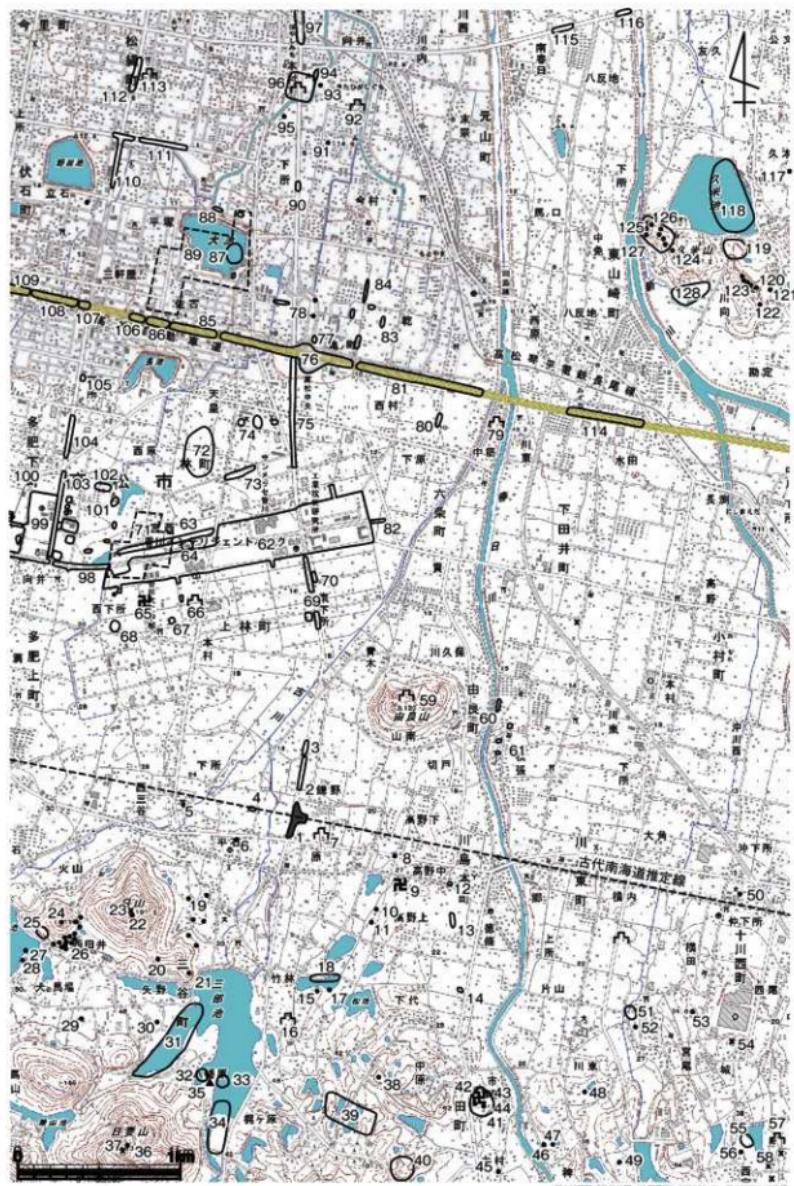
当遺跡南西、住蓮寺池岸付近の雨山南遺跡（25）で国府型ナイフ形石器が採集されている。また西 500 m の横内東遺跡（6）では一側縁加工のナイフ形石器が複数点出土しており日山周辺における旧石器時代遺跡の群在が予測される。正式な火山灰分析例はないが、AT 火山灰降灰以後の後期旧石器時代ナイフ形石器文化後半期における遺跡群である。石器石材はいずれも平野の西に所在する五色台山塊頂部、国分台遺跡周辺等で産出するサヌカイトを使用する。

縄文時代

大池遺跡（87）で有舌尖頭器が採集されている。サヌカイト製で基部が逆三角形状に突出する草創期に所属するものである。そのほか東山崎水田遺跡（114）、十川東平田遺跡や、三谷三郎池 C 遺跡（33）でも有舌尖頭器が出土している。このうち東山崎水田遺跡及び大池遺跡は埋没丘陵の存在が想定し難い標高 10 m 前後の沖積地で出土したもので、旧石器時代の開析谷が急速に埋没したことと示す。それを傍証する材料として、標高 17 ~ 20 m に所在する空港跡地遺跡（62）では弥生時代以後の遺構面下位の自然河川跡で鬼界アカホヤ火山灰純層のレンズ堆積層が、またそれら河川跡の基盤となる粘土層では鬼界アカホヤ火山灰を含まない AT 火山灰の二次堆積層が検出されており、鬼界アカホヤ火山灰降灰後に谷の堆積が急速に進行したことがわかる。なお、井出東 I 遺跡（106）では GL70cm で層厚 10cm のアカホヤ火山灰の水平堆積が認められた。

アカホヤ火山灰降灰後の前期の遺跡としては、東植田町の下司遺跡で羽島下層式土器が少量採集されており、山間地の遺跡に早期・前期の遺跡が知られている。まとまった土器資料が確認できるのは後期以後である。後期は前半の彦崎 K I 式（永井 II ~ IV 式）の資料が各所で出土する。平野東側丘陵裾の前田東中村遺跡 D 区自然河川跡 SR01 でまとまった資料が出土している。小山南谷遺跡では自然河川跡 SR625 で津雲 A 式（永井 I 式）、同 SR626 で彦崎 K I 式の資料が出土している。三谷三郎池 C 遺跡では後期後半の凹線文系である福田 K II 式土器が出土している。

晩期に至ると居石遺跡（108）の自然河川跡から木製品とともに晩期前半の谷尻式土器が出土している。後半期の突帶文土器は東中筋遺跡で上下 2 層で出土しており、上層では弥生時代前期の遠賀川系土器が伴う。



第3図 周辺遺跡分布図

弥生時代

前期では標高6mの東中筋遺跡出土資料は沖積低地の河川堆積層から遠賀川系土器壺底部と突帯文系土器が共伴する前期前半古相の資料である。下位の突帯文土器単純層の放射性炭素年代測定（AMS年代測定）による年代は紀元前800～750年と示されており、上位の当該資料はこれよりやや新しい年代が与えられる。汲汲遺跡では前期前半新相から開始する環壕集落、空港跡地遺跡（62）では堅穴建物、土坑、河川跡が検出されている。また北野遺跡（3）では水田跡が検出されている。

中期の遺跡は多肥松林遺跡（99）では中期前半の河川域に面して掘立柱建物と円形平地建物の組み合せによる建物群が検出されている。同時期の井出東I遺跡（106）では河川内から多彩な木製品が出土し楽器の木製琴も含まれていた。付近には凹線文出現直後に廃絶する遺跡が多く平野全体で中期後半（凹線文）期の遺跡が少ない。

後期初頭からは各所で遺跡が出現する。上天神遺跡・太田下須川遺跡・天満宮西遺跡（112）では在地土器が茶褐色系の香東川下流域產と称される特徴的な胎土に変化するとともに、多くの撤入土器や朱の精製用の容器が伴う。それまでにない交易領域を示す出土品の組成である。また、同時期の太田原高州遺跡では大小の方形周溝墓からなる墓域が形成され、主体部からは日本海岸地域からもたらされた可能性が高い水晶玉が出土するなど、人の移動を伴う外部からの文化移入を読み取ることができる。

後期後半から古墳時代初頭は遺跡数がさらに増加する。空港跡地遺跡（62）では周溝墓を伴う集落が確認された。周溝墓には円形と方形がある。いずれも突出部付で全長約15mの墳丘の周間に一辺（直径5m）ほどの小形の周溝墓がそれぞれ付随する。出土遺物から後期後半新相から終末期にかけての時期で集落内の単位ごとに異なる形状の周溝墓が構築されたものであろう。

なお剥片石器石材として縄文時代から使用され続けた金山産サヌカイトの流通は後期後半から途絶え、利器の鉄器化がうかがわれる。

古墳時代

高松平野中央北端部には山上に安山岩のキャップロックをもつ石清尾山丘陵がある。その丘陵上には安山岩の板石や塊石を積み上げて構築した積石塚（石清尾山古墳群）が多数分布する。標高100mクラスの石船塚古墳を始め猫塚古墳・鶴尾神社4号墳などの前方後円墳や双方中円墳が所在し、古墳時代前期末ごろまで継続的な系譜が辿れる。

一方で平野東側には船岡山古墳、高松茶臼山古墳（120）、池戸八幡神社古墳といった40～70mクラスの前方後円墳の系譜がある。その周囲には前期でも前半段階の可能性がある20～30mクラスの小規模な前方後円墳も点在する。調査地南側の丘陵頂部にある全長31mの瘤山1号墳（20）は塊石積みの堅穴式石室が残存する例である。このような中小規模の前方後円墳は三谷石舟古墳（15）へと系譜が続く。三谷石舟古墳（15）は全長88mの大規模な前方後円墳で中期前半と推定され、後円部に露出する棺は高松市国分寺町鷺の山に産出する角閃石安山岩製の削抜式石棺である。地域統合を象徴する盟主墳的な前方後円墳で、その後は大形円墳に転換し盟主墳の系譜が続く。調査地近くには直径42mの大形円墳の高野丸山古墳（8）が所在する。地表面に周濠の痕跡がある。

中期後半には平野東部の池戸丘陵に所在する権八原古墳群において初期須恵器を納めた群集墳が展開しその眼下の平野部には六条上所遺跡（81）、尾崎西遺跡、陵遺跡で陶質土器や韓式系土器が出土するなど渡来系文化的な移入が認められる。近隣の三谷三郎池西岸窯跡（35）は県内最古の須恵器窯として知られている。

後期では大形の横穴式石室を有する古墳が平野部に点在する。矢野面古墳（30）は全長9.1mの両袖式石室を有す巨石墳で、盟主墳の系譜上にある。また周辺丘陵裾を中心に雨山南古墳群（26）や三谷石舟池古墳群（18）などの群集墳が展開する。

集落跡は太田原高州遺跡、大下遺跡で後期から古代はじめ頃の集落が確認されている。両者は一連の集落で、太田原高州側では大形建物に玉類や金属器生産跡が伴い、大下側では中小形の堅穴建物が多数重複して分布するなど、階層的な居住分化が明確である。7世紀後半以後は堅穴建物はなくなり、ほぼすべての建物が掘立柱建物に移行する。

古代

7世紀後半の集落跡が空港跡地遺跡（62）や多肥遺跡群で検出されている。8世紀以後の集落は建物や溝が条里方向に揃うことから8世紀前半の条里地割の施工が想定できる。高野庵寺（9）は奈良から平安後期までの瓦が知られ、継続した寺院経営が窺われる。周辺集落の調査は例が少ないが古墳と寺院の分布から有力豪族の存在が想定できよう。

今回の調査地は讃岐国山田郡三谷郷に属し、三谷郷は現在の三谷町一帯に比定されている。延喜式によると、讃岐国内6か所の駅家のうちの一つである「三谿駅家」が郷内に所在し、馬四頭を常備し、当郷内を南海道が通過していた。

調査地周辺に限らず、高松平野全城には北から9～11度東偏した条里地割が広範囲に分布し南海道はその地割の基準線と位置づけられる。金田章裕氏は南海道は高松平野主要部では三木町白山（203.0m）と六ツ目山（317m）北側の傾斜変換点を見通すように設定された完全な直線道と推定し、推定線部分の南北幅が東西幅に比べて10m程度広いことから、「条里地割が道路敷に相当すると推定される一定幅を除いて施工されている」として「条里地割の施工が、南海道の官道の設定以後」と考え、後章で詳説のとおり現地形に残る古代官道の「遺構」の存在も指摘して南海道の推定線を明確に規定した。当遺跡はその推定線がちょうど調査区内に入る。つまり調査地及びその周辺には南海道及び三谷駅家を核とする官衙施設の存在が強く想定される状況である。

中世・近世

中世では城館跡が多く、三谷氏の上佐山城・三谷城（16）、鎌野氏の鎌野城（7）、由良氏の由良山城（59）など小地域単位の土豪の拠点が残存し戦国期の状況を伝える遺跡が多く分布する。

第3章 調査成果

第1節 調査地区割及び層序

調査地区割は第4図のとおりI区からIX区まで付した。このうち、I・II・IV・V・VI・VII区について平成13年度、I区西拡張・III・VIII・IX区を平成14年度に調査した。調査区内はすべて一度に調査したわけではなく、土砂排出等の関係上アルファベット小文字等を使って調査区を細分しながら調査を進めている。遺構名は原則として調査区ごとに種別+連番で付してあり、整理作業においては全く番号変更は行っていない。なお、このうちI・II区とIII区間に歴史地理学の研究成果に基づく古代南海道推定線がある。

第6～26図に調査区ごとの土層断面図を掲載した。以下、調査区ごとに層序・微地形を説明する。

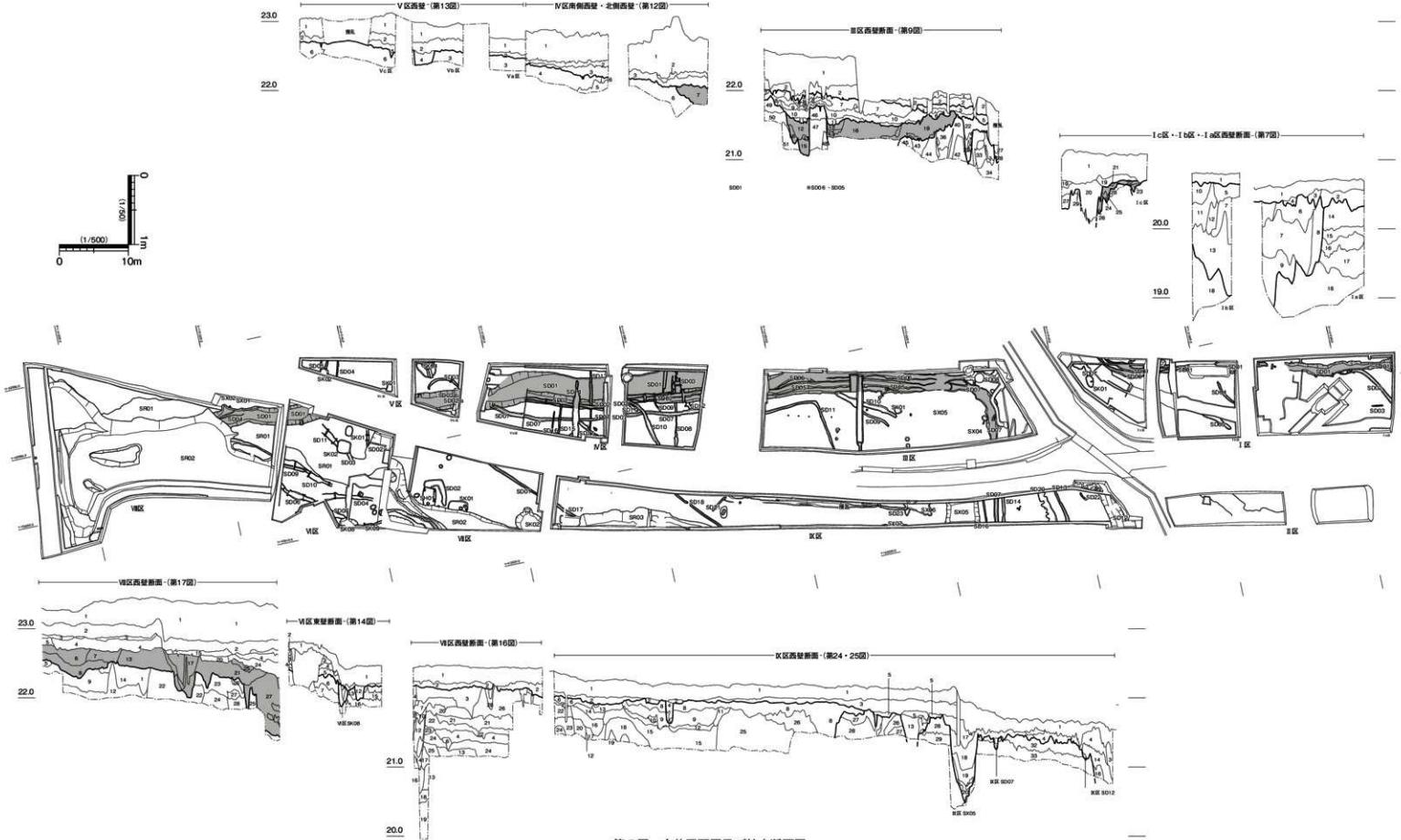
I区北からIa区・Ib区・Ic区に区分して調査が進んでいる。Ia区北壁断面及びIa区西壁断面では耕作土直下に基盤層である褐灰色粘土（北壁12層・Ia区西壁5層）がある。堅く締まった粘土層との記録が残る。西壁ではその下位に黒褐色粘質シルトや灰色砂層などで構成される河川堆積層が存在するが出土遺物もなく河川の時期は不明。Ic区西壁拡張断面では暗灰色粘質シルト（⑤Ic区西壁 拡張28層）を基盤とする同一層がある。その他の断面でも20.6m前後が検出面である。すなわち、元来時期不明ながら厚い河川堆積層が形成されていたと思われるが、その堆積途上である堅く締まった粘土層まで大きく削平を被っている。SD01・SD06が条里方向の溝で、Ib区西壁では縦断面が観察できる。Ic区西壁では南縁の搅乱層に切られて両溝が西に向けてカーブする断面が捉えられる。

II区は完全な削平面である。調査区内の遺構検出ラインは搅乱検出ラインである。

III区は西壁で基盤層の黄褐色粘土（西壁36層）最高点標高が21.5mあり、北端は搅乱があり北壁で標高21m付近で基盤層の粘土層（部分的に砂層、北壁44-48層）がみえる。基盤層は南ほど上界しIII区南端では標高22mに達する（III区東壁断面



第4図 調査地区割図



第5図 全体平面図及び縮小断面図

の南端 33 層上面)。SD05 ~ 07 が条里方向に走行しそのうち SD07 が東に屈曲する形状を呈する。これらもすべて基盤層の削平面で検出したものである。なお、東壁の 14 ~ 31 層は後述する南から北に向かう自然河川の流路 A に合流する後背低地に形成された窪み (SX04・SX05) である。

IV 区はⅢ区の南に位置する調査区で西壁を参考にすると粘土層を基盤 (北側西壁 6 層) として北端で標高 21.8 m、南端で 22.4 m と約 0.6m 上昇している。ここでも耕土層直下が遺構検出面であり、SD01・SD02 の条里方向の溝が基盤層を掘開する。

V 区も同様に粘土層 (西壁 4 層) を基盤とする。

VI~VII 区は南から北東方向に流下する自然河川の堆積層とその埋没後の条里方向の溝がある。自然河川は弥生時代後期から古墳時代にかけて埋没した流路 A と古代 8 世紀代に埋没した流路 B に分かれしており、条里方向の溝は流路 A の埋没後に掘開しているのは間違いないが、流路 B は条里方向の溝との重複関係を十分に精査せずに重機で掘り下げているために、重要な切り合い関係は部分的な土層断面から類推せざるを得ない。層位関係の詳細は後に詳説する。

VI 区の土層断面図は下層の自然河川掘削前に記録した断面図である。南壁 14 層は自然河川 (流路 A=VI 区 SR01) 堆積層で、17 ~ 22 層の条里方向の溝 (SD01) が切っている。

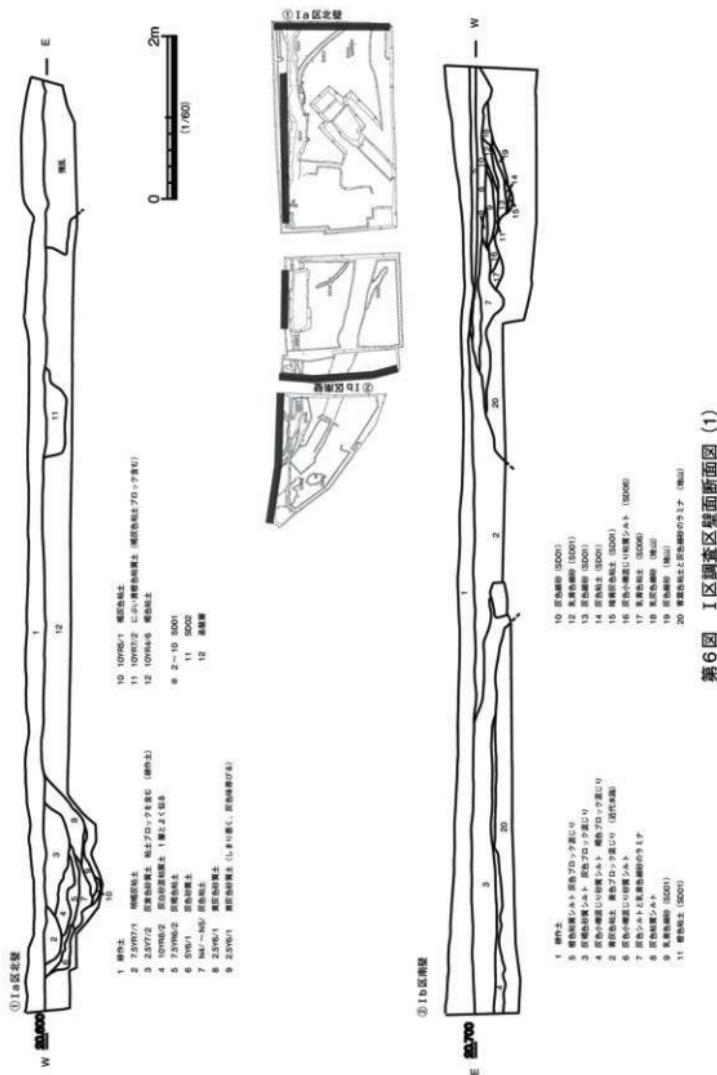
VII 区は南壁で自然河川流路 B (VII 区 SR01) が流路 A (VII 区 SR02) 堆積層を V 字状に深く切り込んで流下する断面が示されている。流路 B 最下層の黒茶色粘土層 (南壁 18 層) 付近から斎申等の木製品 (239 ~ 244) が出土している。

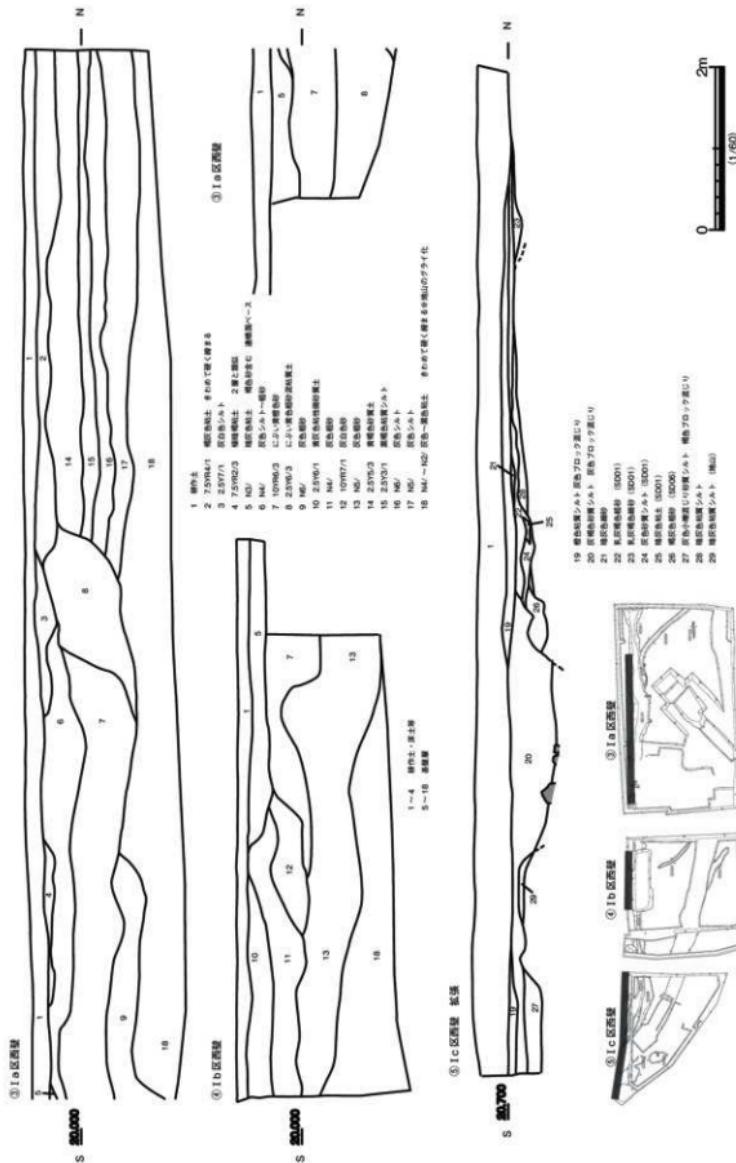
VIII 区は県道三木国分寺線に面する遺跡南端の調査区である。北壁断面で条里方向の溝 (VIII 区 SD01・02・04、4 ~ 19 層) と自然河川流路 A (VIII 区 SR01、37 ~ 57 層)、同流路 B (VIII 区 SR02、20 ~ 36 層) 及び基盤層である橙色粘土 (51 層) 及び流路 A 西肩部の基盤層である粘土砂交互層 (58 ~ 63 層) が確認できるが、流路 B と条里方向の溝との層位的な関係性はこの断面では不明である。南壁断面ではほぼ全面的に流路 B 堆積層が認められるが、西端近くで若干の窪みを伴う堆積層がある。この部分については記録作成時には気付くことができなかった条里溝との切り合い関係が示されているものと考えられる。詳細は条里方向の溝を報告するにおいて溝底レベルの比較等から旧状復元を試みている。

IX 区では自然河川流路 A の北端 (IX 区 SR03) が北東方向の調査区外に出る部分 (東壁 2 の 6 ~ 24 層) までを示している。それ以外は黄色系シルト層の基盤層が広がり、I ~ V 区の基盤層と共通する。

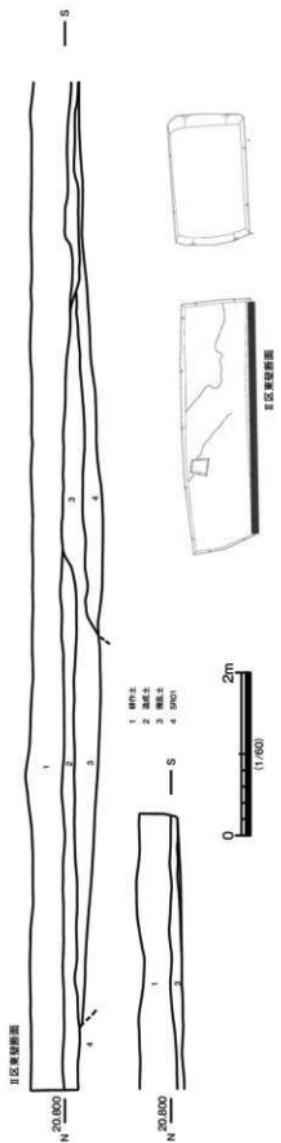
以上の土層断面を第 5 図に縮小して掲載した。ここから観察できる微地形をまとめると、弥生期以前の自然河川により堅く締まった粘土砂の堆積で形成された基盤層を弥生時代後期以後の自然河川が開析し、その埋没途上もしくは埋没後に古代まで継続した自然河川がさらに大きく開析、その埋没途上または埋没後に条里方向の坪境溝が掘開された。上記の自然河川は南端のVII 区から北東方向に流下し IX 区で調査区外に出る。その西岸は基本的には粘土層を基盤とする削平面で、条里溝はそれを切り込んで掘開する。遺構検出面はその後の耕作等によりさらに大きく削剥されながら、北に向かって基盤層は下降していた。古代南海道推定線であるⅢ区北端付近と斜め方向の水路及び里道を挟んで北側の I ・ II 区基盤層との標高差は 0.9m 以上あり、特に北側の I ・ II 区における上部削平が著しいものと思われた。

以下、遺構種別の順で遺構・遺物を報告する。

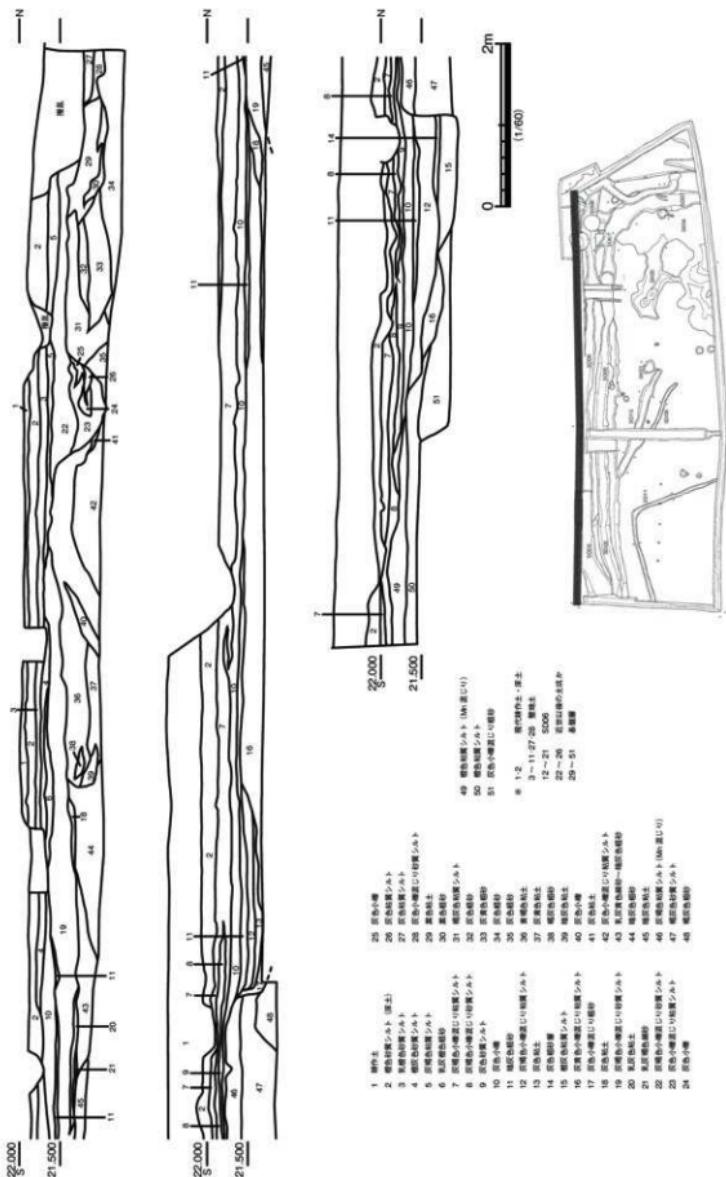




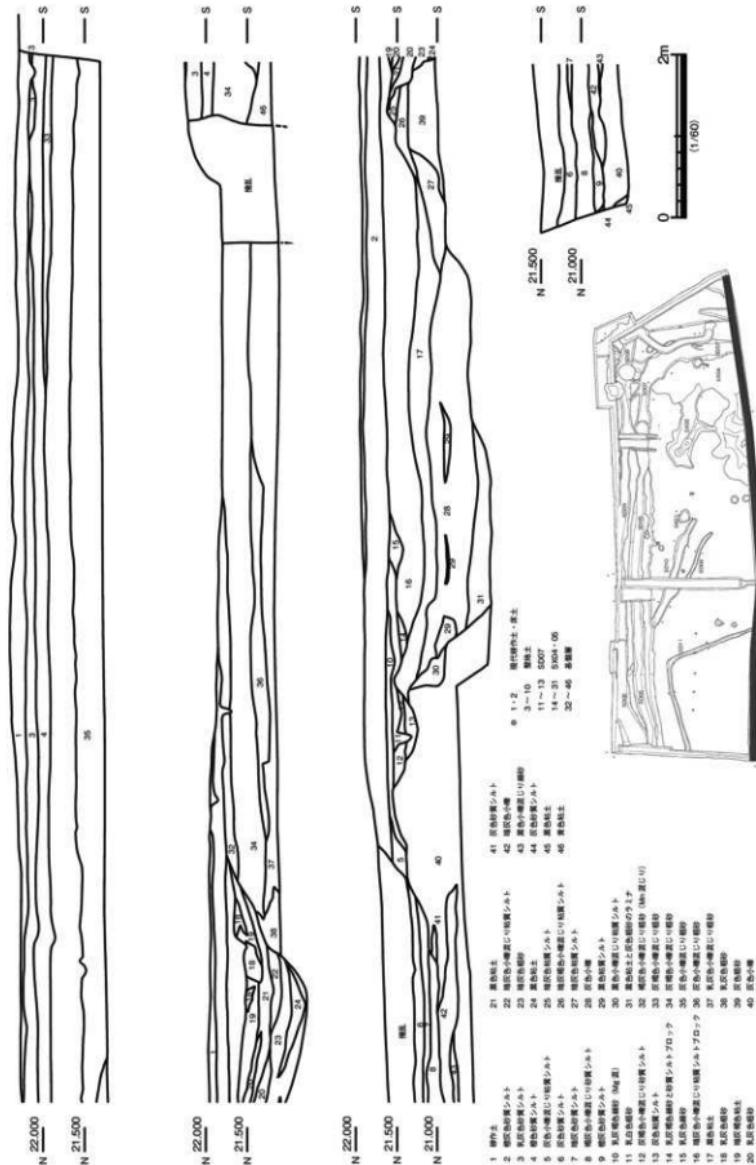
第7図 I区調査区壁面断面図 (2)



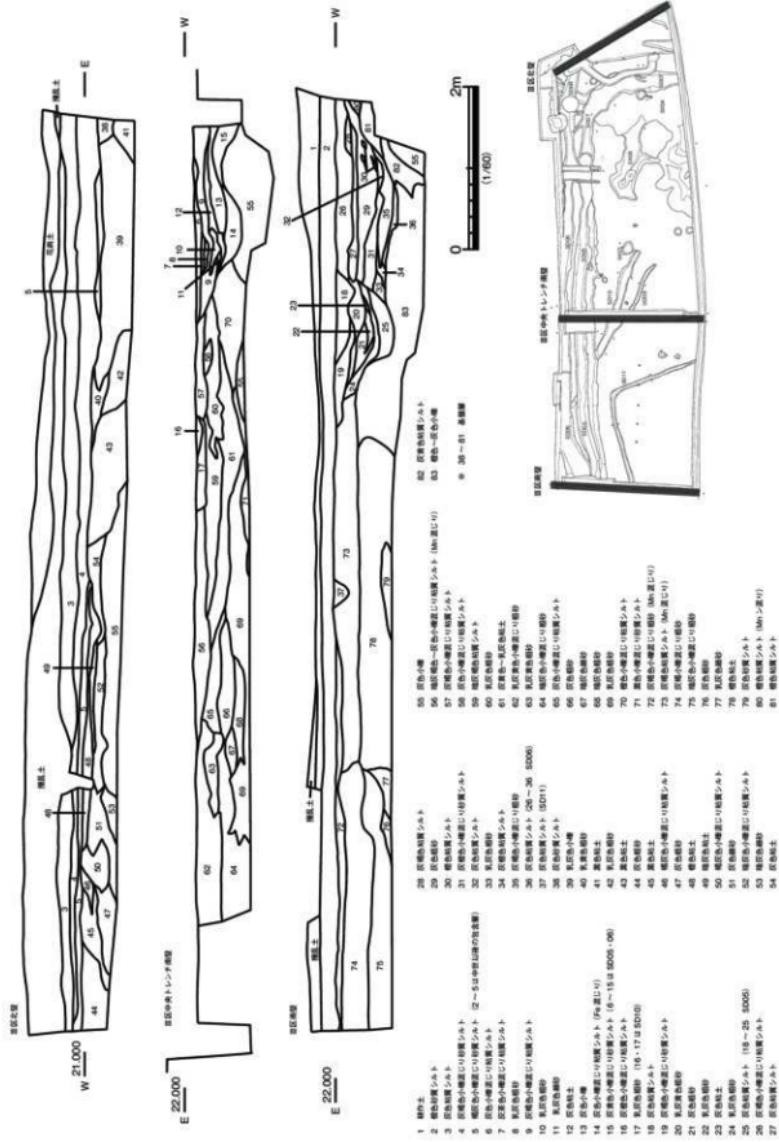
第8図 II区調査区縦面断面図



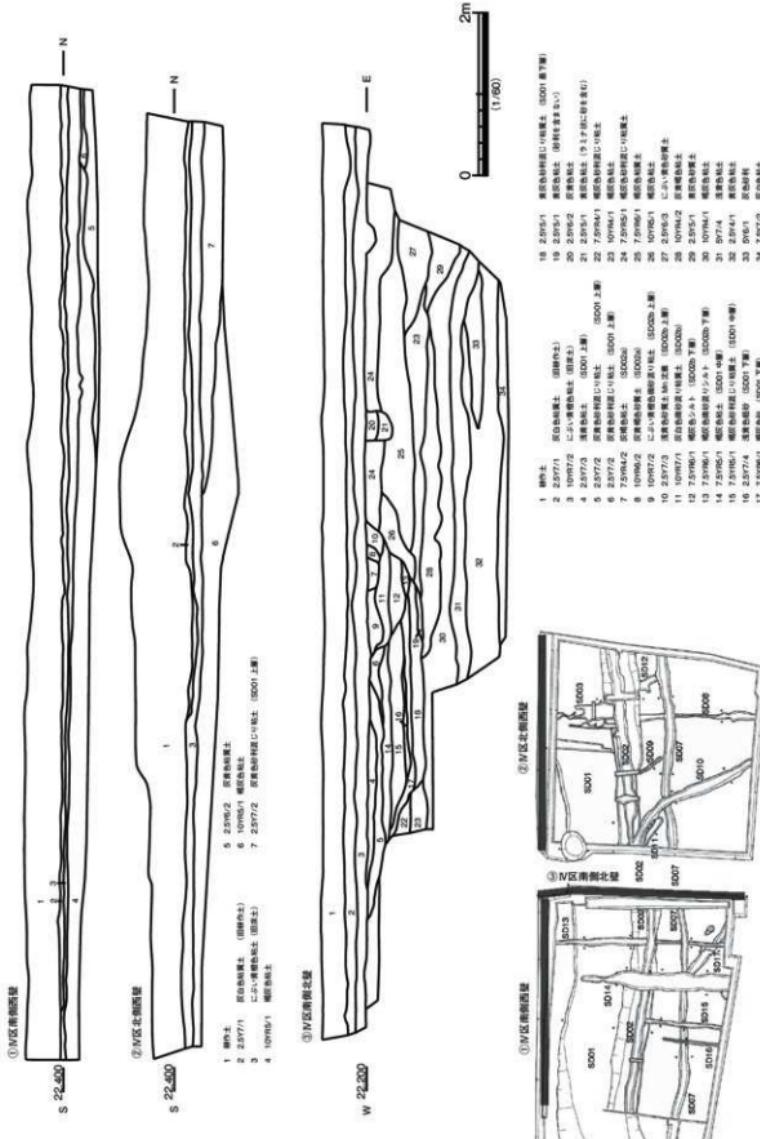
第9図 Ⅲ区調査区縦面断面図（1）西壁



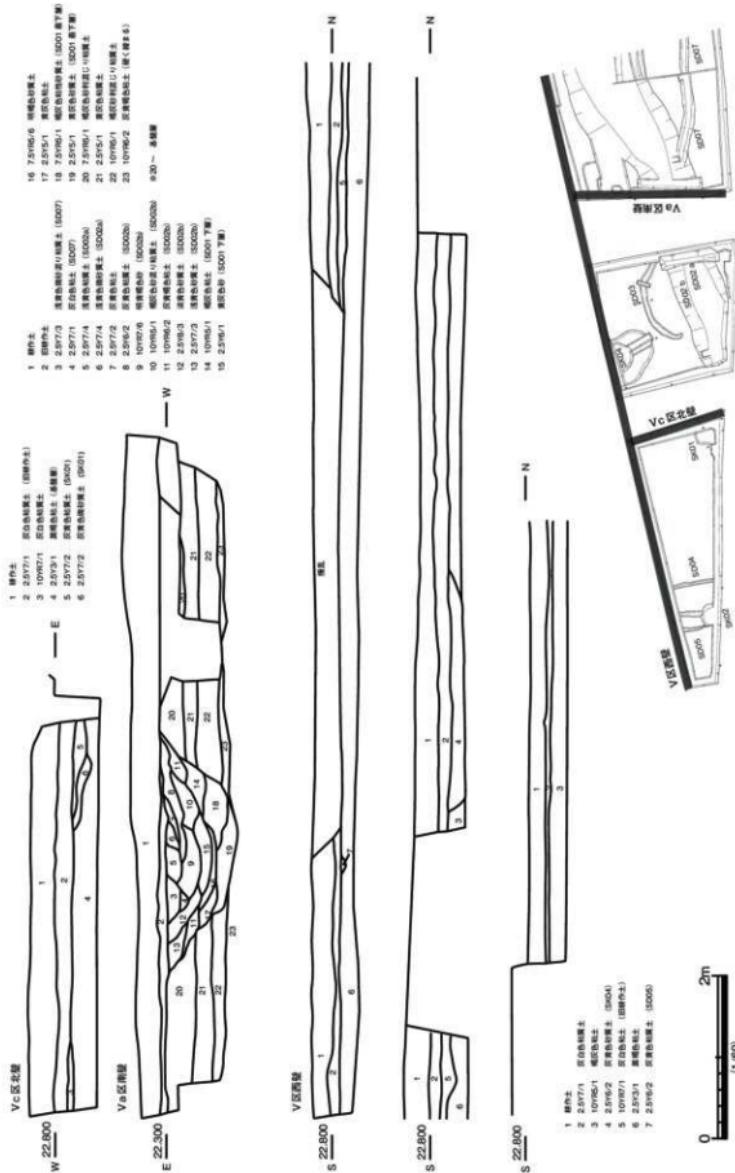
第10図 III区調査区壁面断面図 (2) 東壁



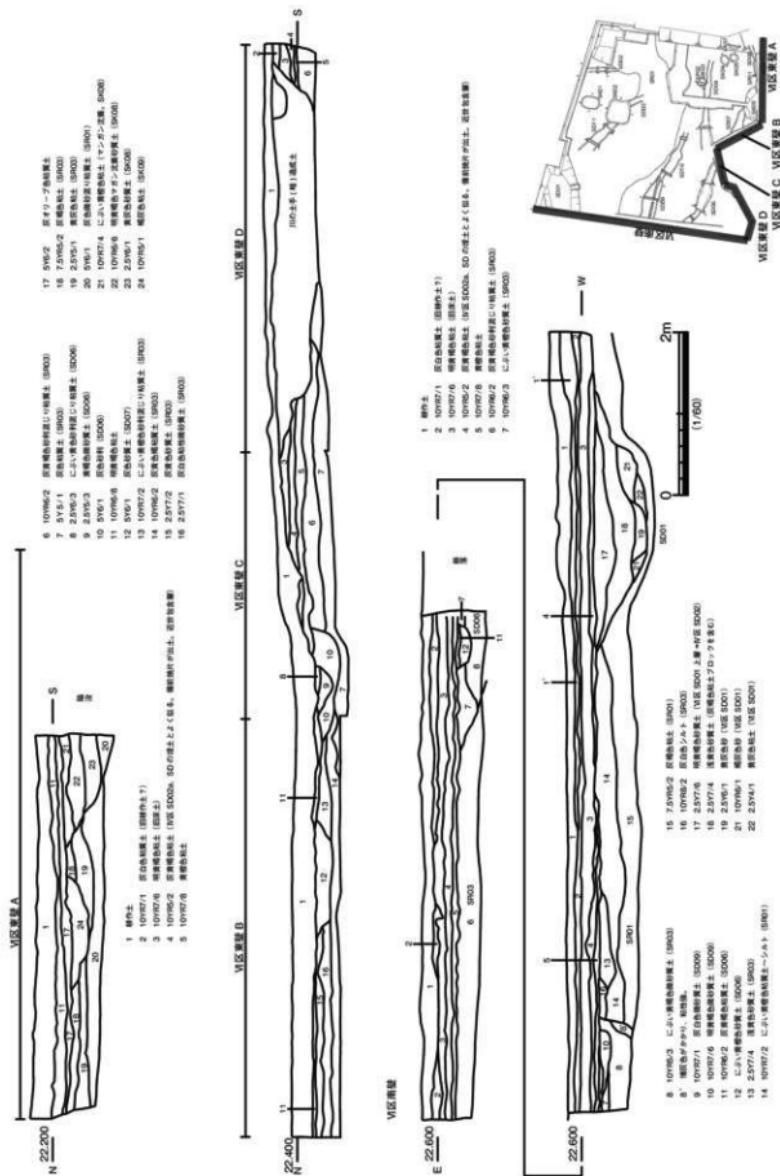
第11図 Ⅲ区調査区壁面断面図 (3) 東西断面



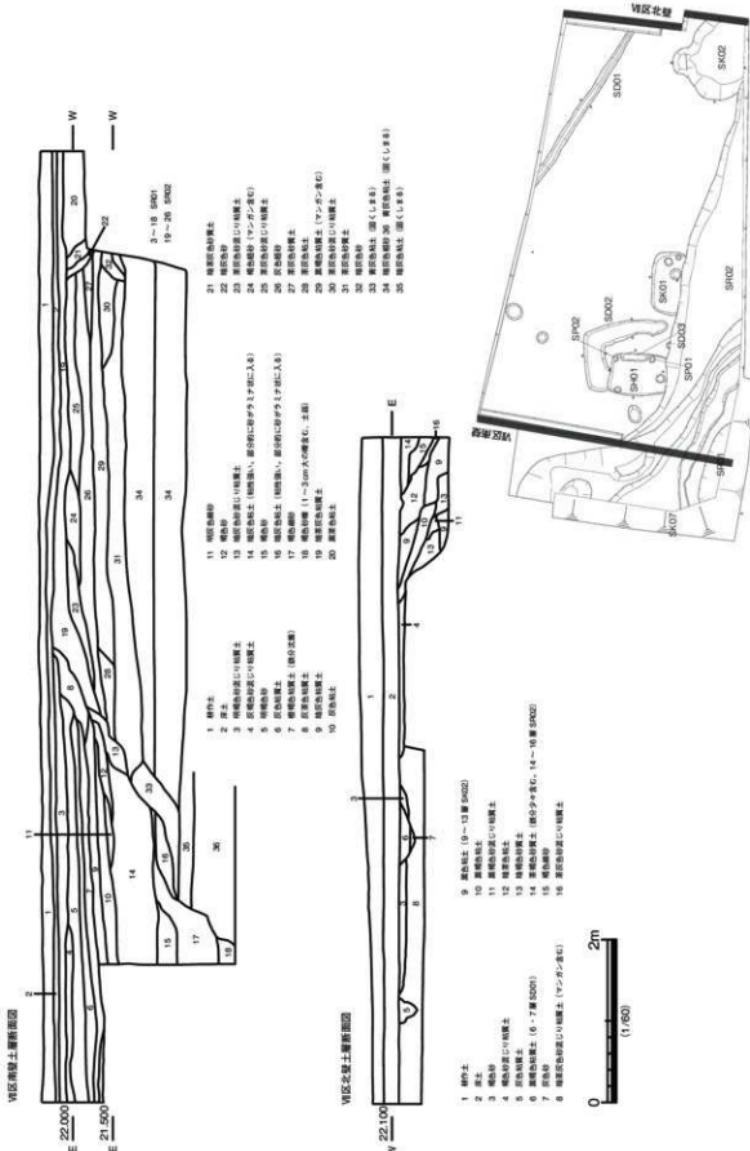
第12図 IV区調査区壁面断面図



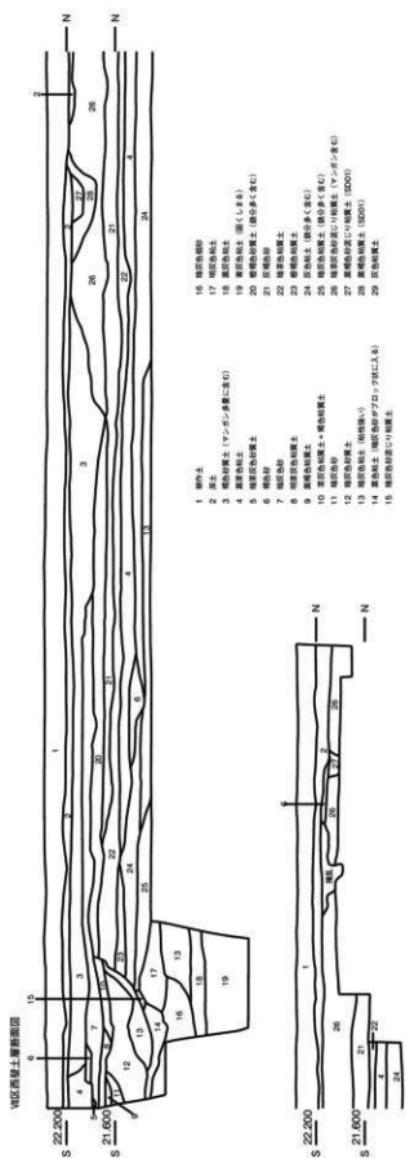
第13図 V区調査区壁面断面図

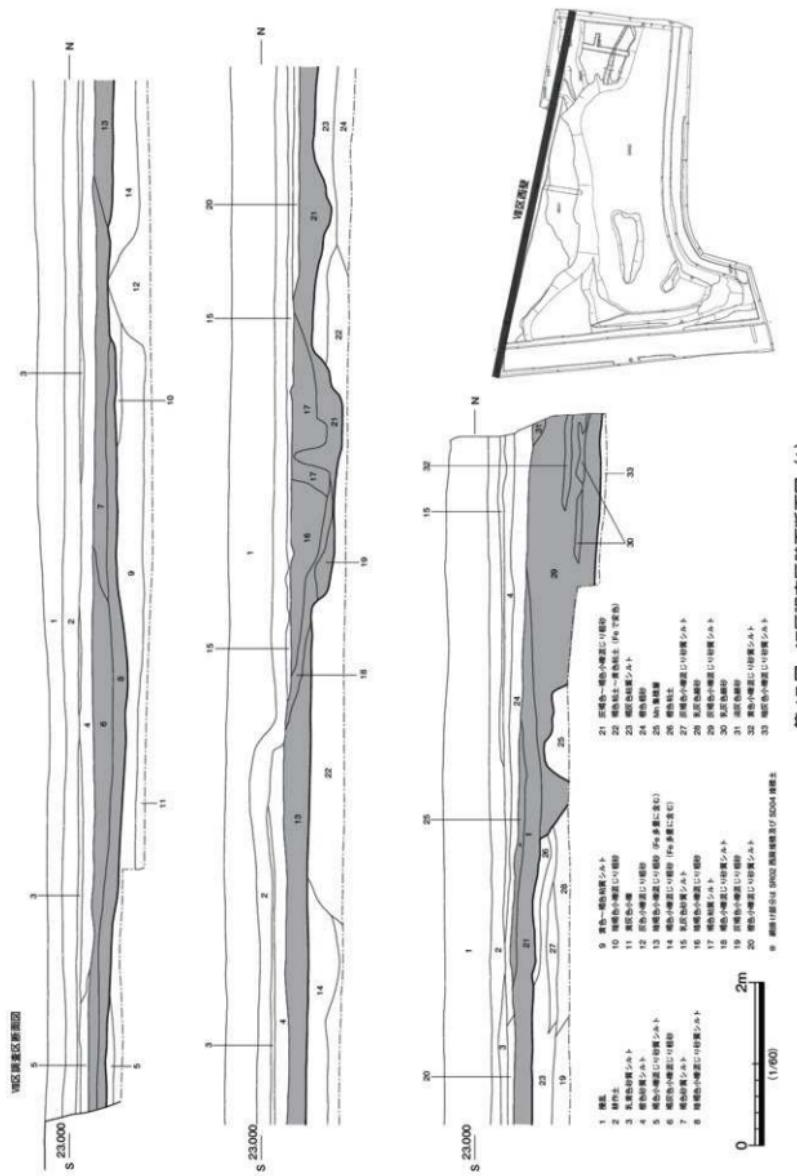


第 14 図 VI区調査区縦面断面図

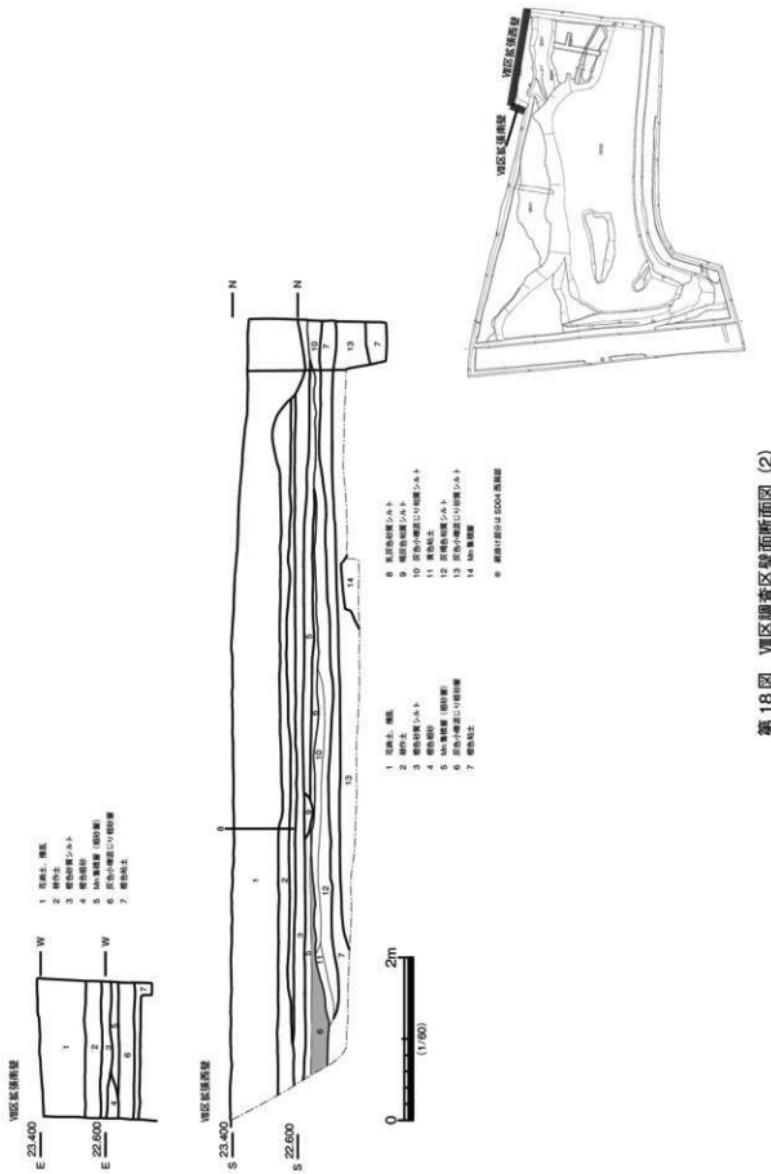


第15図 VII区調査区壁面断面図 (1)

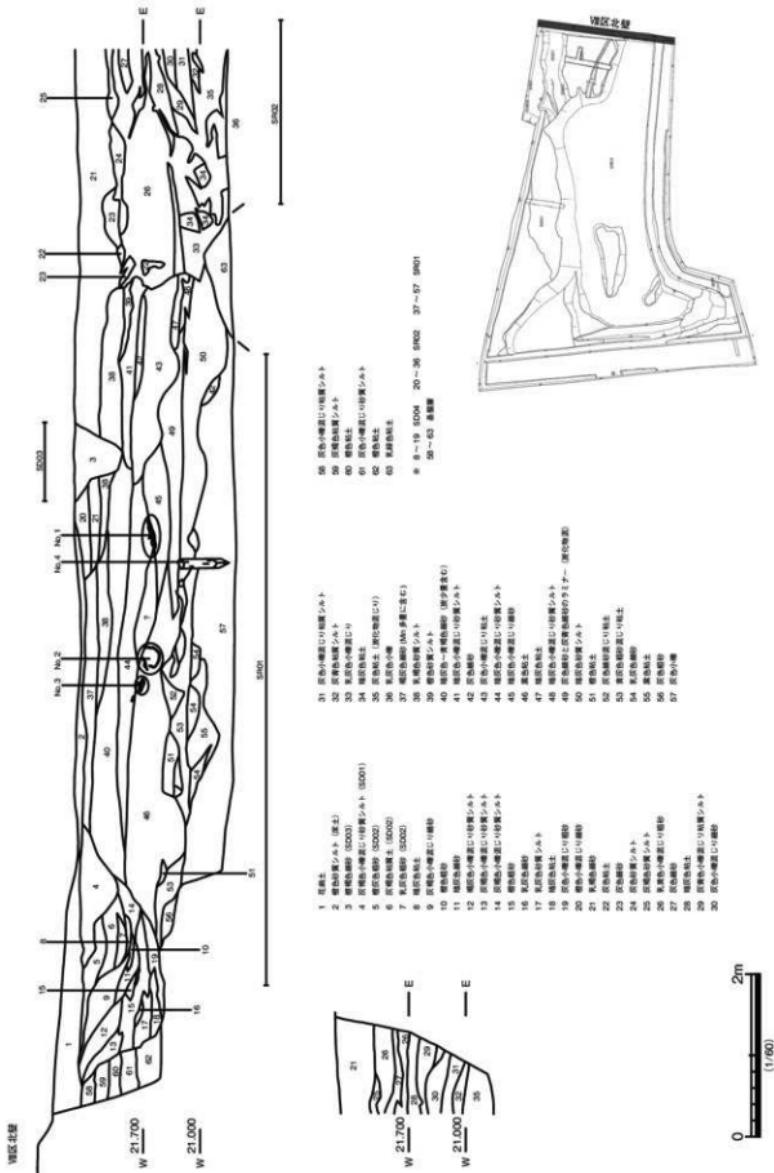




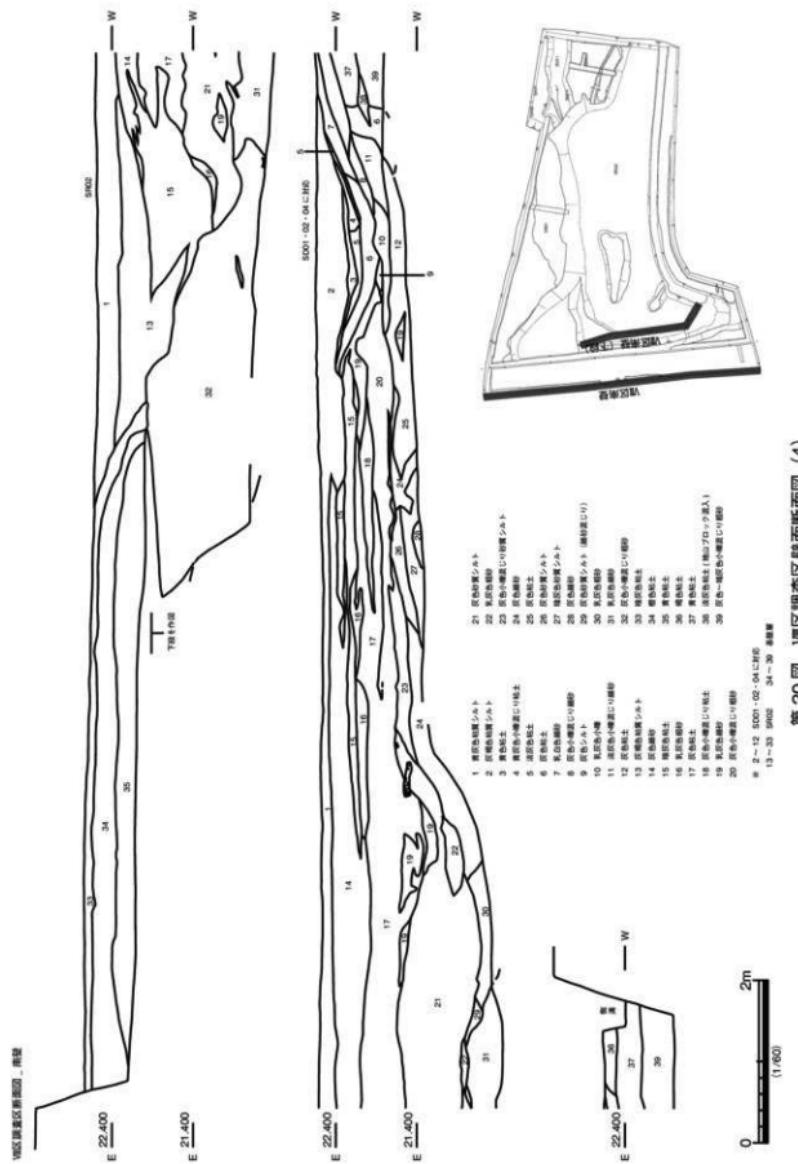
第17図 VII区調査区断面図 (1)



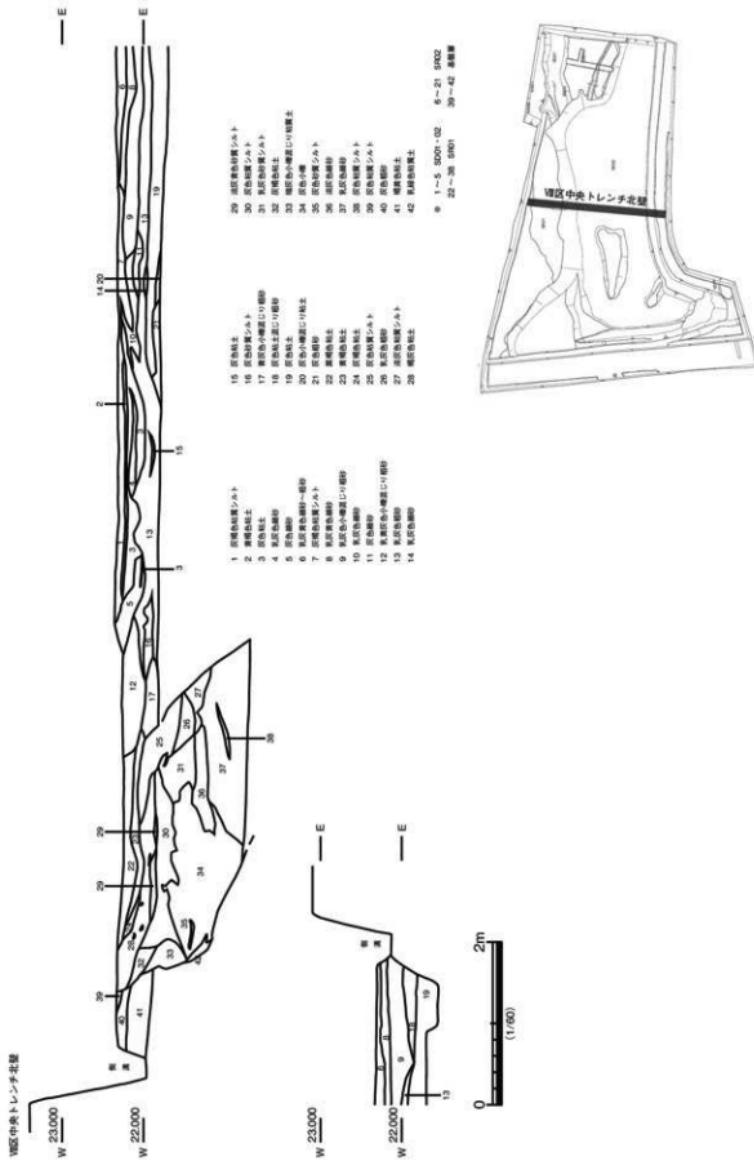
第18図　Tajima Nakayama Survey Area Cross-Section (2)

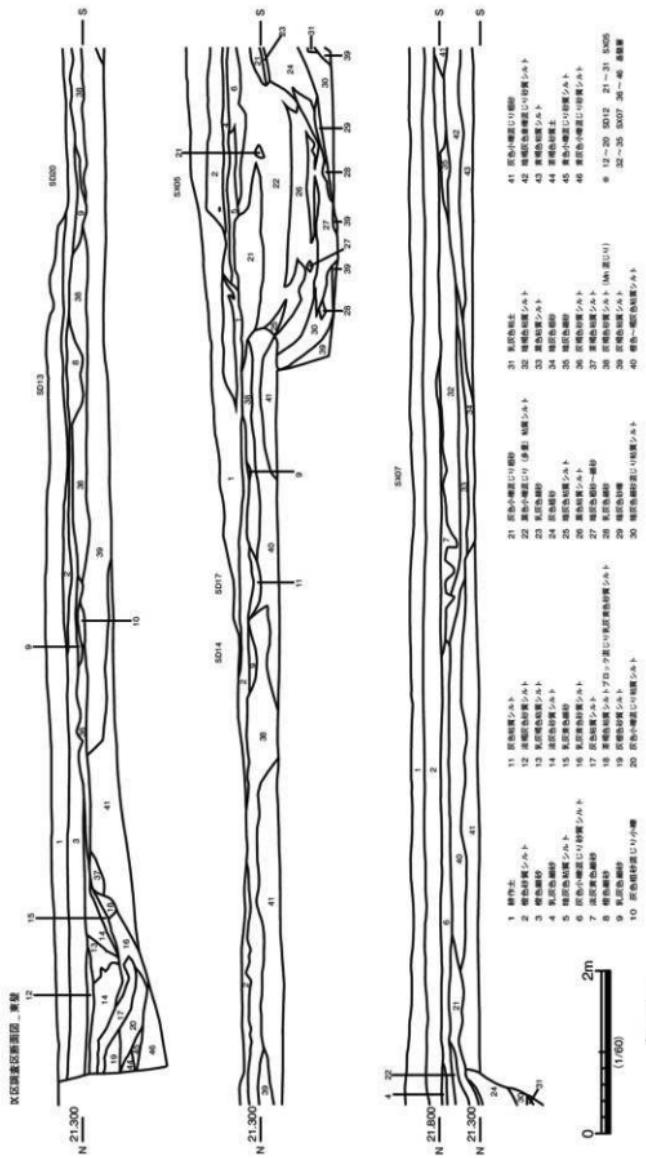


第19図 V1区調査区壁面断面図 (3)



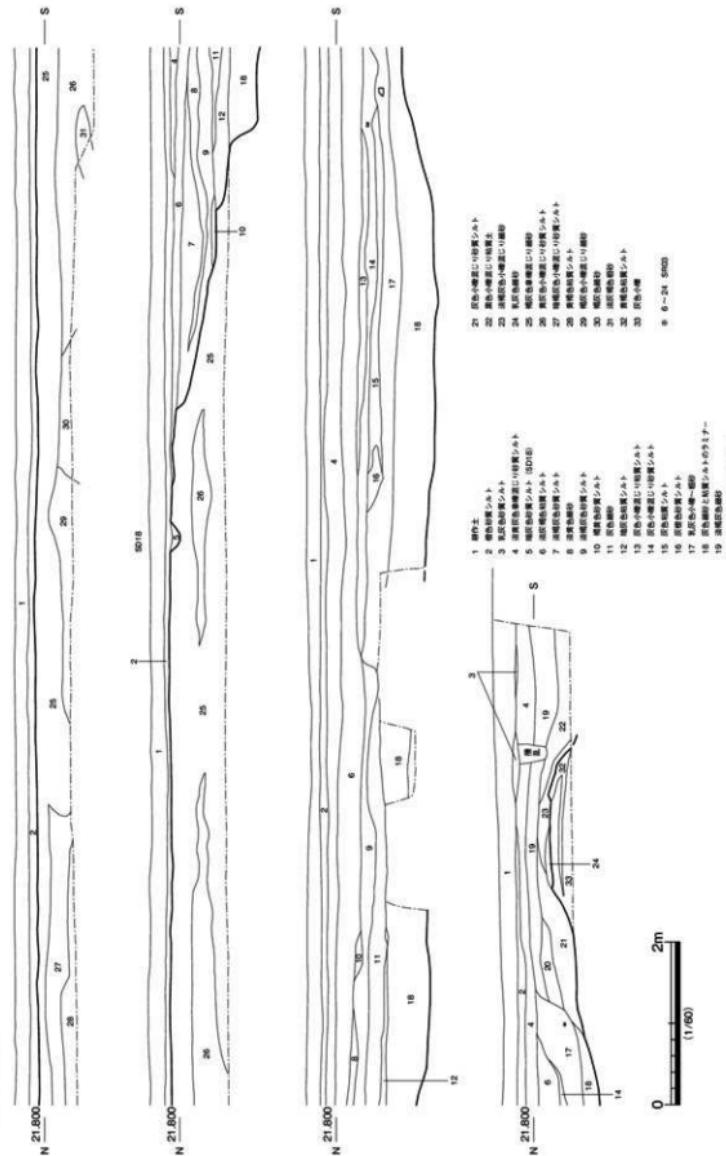
第20図 VII区調査区横断面図 (4)



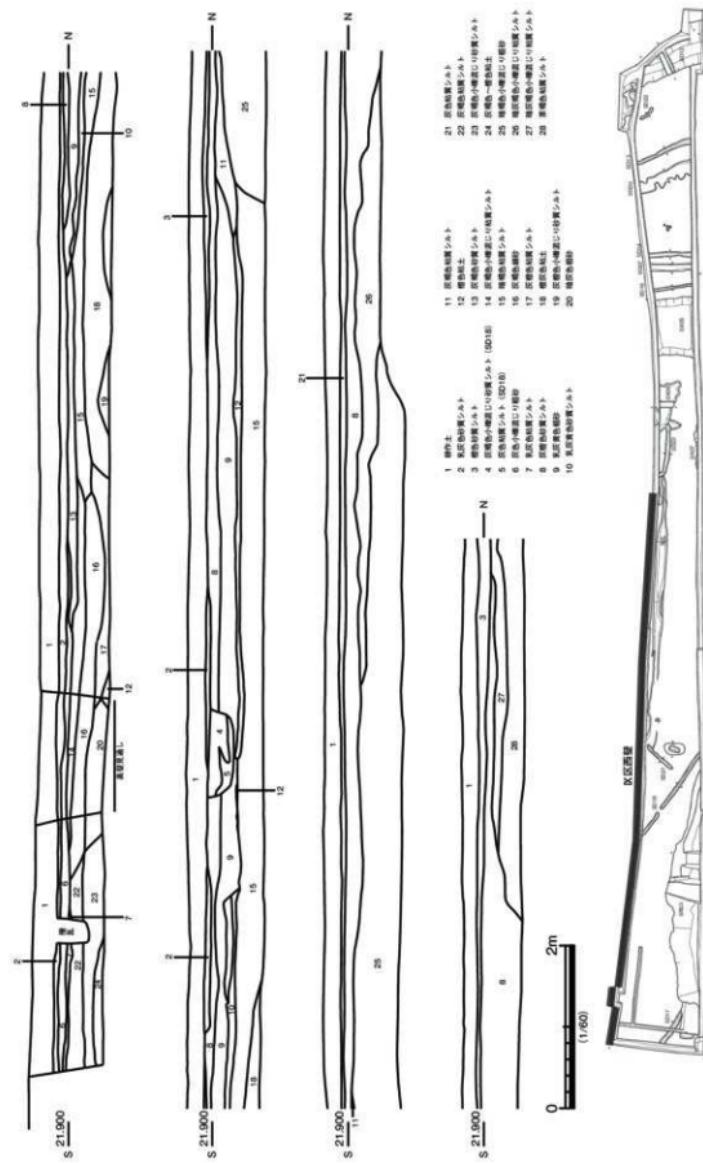


第22図 K区調査区壁面断面図 (1) 東壁1

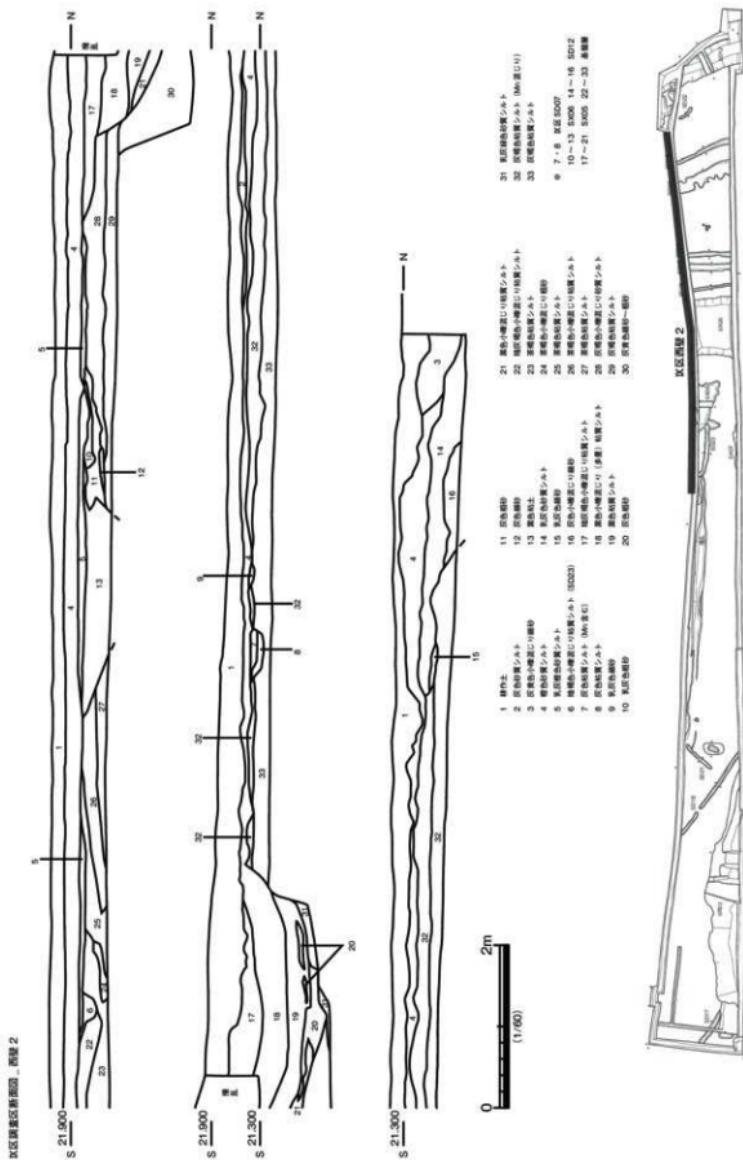
K区調査区断面図_第2回



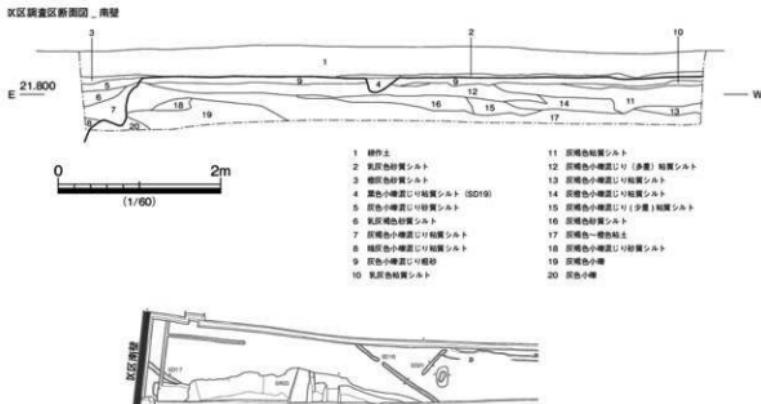
第23図 K区調査区縦面断面図(2) 東壁2



第24図 IX区調査区縦断面図（3）西壁1



第25図 K区調査区壁面断面図（4）西壁 2



第26図 IX区調査区壁面断面図(5)南壁

第2節 遺構・遺物

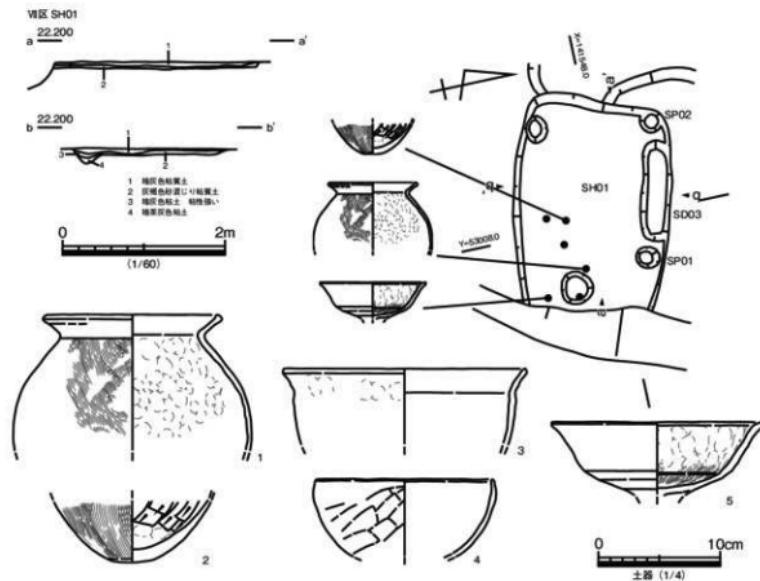
(1) 穴穴建物

VII区 SH01

弥生時代後期から古墳時代に所属すると考えられる自然河川VII区 SR02（IX区 SR03に接続）の西肩部で検出した浅い方形土坑である。東西に長い長方形を呈し東側はSR02により切られる。

東西2.6m、南北1.9mで底面は平坦である。底面で柱穴4基、北壁沿いで溝1条を検出した。検出面から底面までの深さは0.1m、柱穴のSP01は底面から深さ0.14m、SP02は深さ0.1m、溝SD03は深さ0.08mといずれも浅い。埋土は暗灰色系粘質土で埋積し、炭化物等が含まれた形跡はない。このように調査記録では穴穴建物としているが、明確な主柱穴がなく、床面には炉跡などの火処遺構がないので、遺構の性格は不明としておく。

1～5は土器である。1は体部球胴化した下川津B類系の壺である。口縁部が長く間延びし端部の上部への摘み上げも丸味を帯びて鈍い。口縁部直下の体部上半は強い内傾はみられない。体部外面はハケ調整、内面は全面押さえ痕跡が残る。2は厚底の壺底部、内面へラケズリし体部は薄く仕上げる。3は口縁部が屈曲する鉢である。深みのある体部だが、口縁部の屈曲は緩やかで鈍い。4はボール状鉢で内外面ともナデ仕上げ、5は高杯で外面はナデ調整、内面は杯部見込みに放射状のヘラミガキを施す。杯口縁部境の屈曲は外面ナデ仕上げにより、明確な稜線を形成しない。これらの土器は弥生土器からの系譜をとどめた古墳時代前期前半期でも古相の土器の一群である。1・2・5が床面から出土しており、当遺構の埋没時期を示すものである。



第27図 VII区 SH01 平・断面図、出土遺物実測図

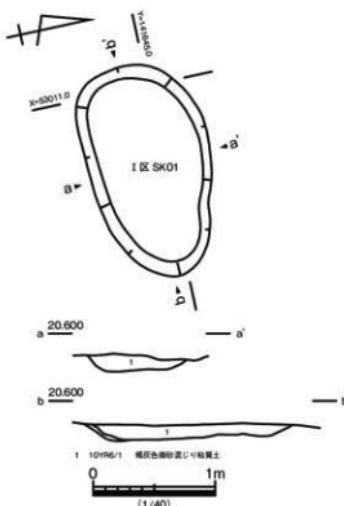
(2) 土坑

I区 SK01

I区南端付近の搅乱除去後に検出した土坑である。平面形が楕円形で主軸は北から 92 度西に振れる。深さは約 0.1 m を測り、断面は底面は平坦で、側面は緩やかなカーブを呈して立ち上がる。埋土は灰褐色系砂質土である。検出面の標高は 20.4 m、底面の標高は 20.3 m である。

当該土坑の主軸は北から東に約 10 度振れ、南北方向とは約 12 度の差があり、I・III区間の現水路・現里道の方向に一致する。また後述する IX 区 SD12 も同じ方向で、当該土坑は SD12 を西方向に延長した辺りにある。IX 区 SD12 の西端の底面標高は 20.5 m であり当該土坑とは 0.2 m の差があるが、SD12 底面には若干の凹凸があることから、当該土坑は SD12 の部分的な窪みに対応する遺構である可能性がある。

なお、埋土中には出土遺物はなかった。



第28図 I区 SK01 平・断面図

III区 SK01

III区中央部で灰褐色系小礫混粘質土を基盤とする不定形土坑である。断面も不定形なV字形で深さ0.4m。明るい色調の灰色系粘質土で埋積する。埋土中からサスカイト製石鎌1点が出土した。形状から風倒木痕の可能性が高い。

6はサスカイト製の石鎌である。全形を復元しても長さ2.5cmを下回る凹基式の小形品である。

IV区 SK01

IV区北側調査区の南壁に接して検出した円形の土坑である。直径1.3~1.6mで深さ0.65mで円筒形である。埋土は下層に褐灰色系粘質土が堆積し、中層に基盤土の黄灰色系土の流入があり、上層は黒褐色粘土で完全に埋められる。層位関係から条里方向の溝IV区SD01に後出する。

出土遺物はなく、所属時期は不明だが、遺構形状と埋土の状況から近世以後の田地耕作に伴う水溜の可能性が高い。

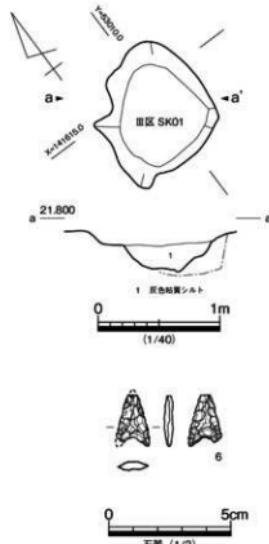
V区 SK01 ~ 04

V区SK01はVc区北端で検出した方形の土坑である。隅部が調査区内にあり、調査区北壁断面にみる最大深さは0.2m、底面は平坦な部分もあるが、北壁断面では凹凸が顕著である。黒褐色粘土を基盤とし、埋土は灰黄色砂混粘質土で埋積する。

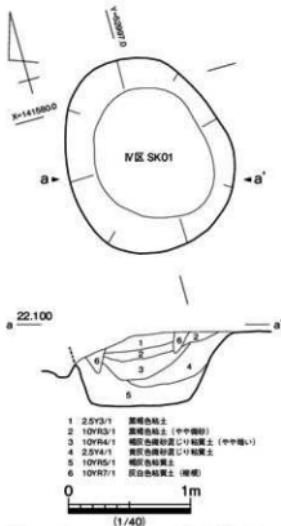
出土遺物はなく、所属時期は不明だが、遺構形状と埋土の状況から近世以後の田地耕作に伴う水溜の可能性が高い。

V区SK02はVc区東壁沿いで検出した円形の土坑である。直径約1.2mで深さは0.2m。断面は緩やかなU字形である。南に隣接して同じ埋土のSK03が所在する。いずれの土坑も埋土が黄褐色粘質土で埋め戻されている。出土遺物はなく、所属時期は不明だが、遺構形状と埋土の状況から近世以後の田地耕作に伴う水溜の可能性が高い。

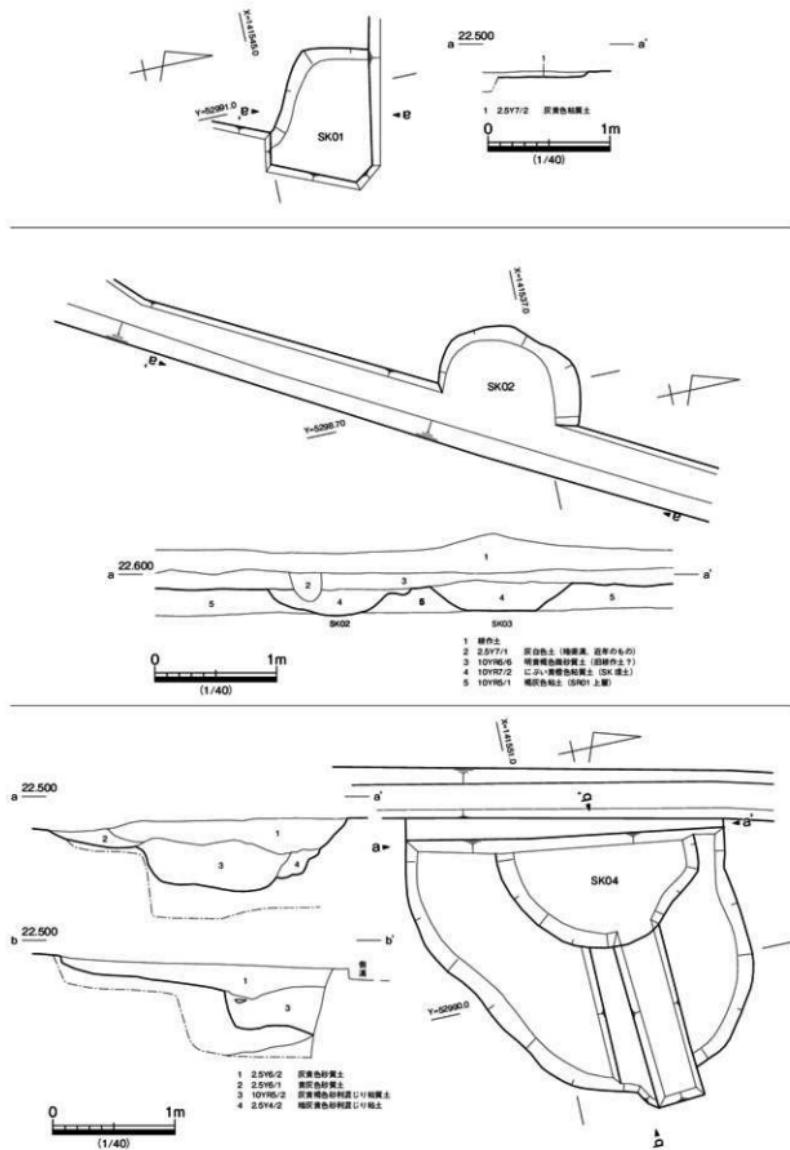
V区SK04はVb区西壁沿いで検出した円形土坑である。直径約1.6mの円筒形土坑の周囲に深さ0.2mのステップが付く。基盤土は褐灰色粘土で埋土は黄色系砂質土である。出土遺物はなく、所属時期は不明だが、遺構形状と埋土の状況から近世以後の田地耕作に伴う水溜の可能性が高い。



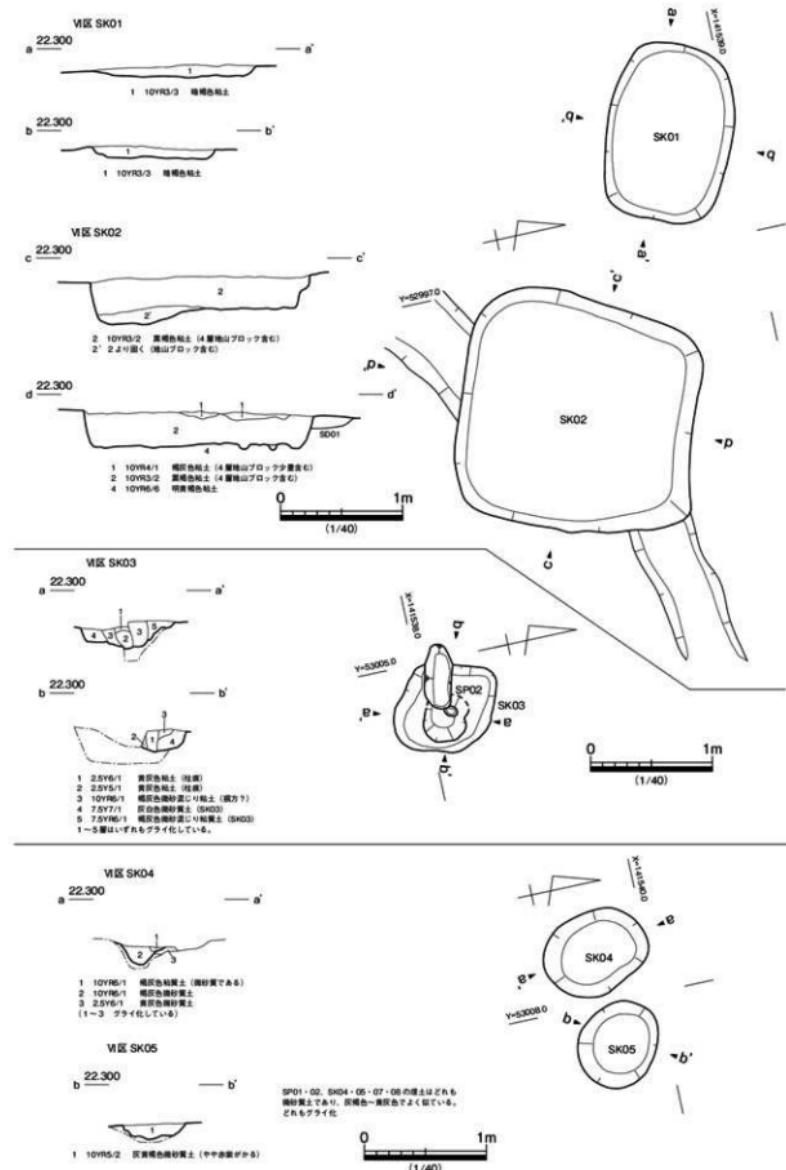
第29図 III区 SK01 平・断面図、出土
遺物実測図



第30図 IV区 SK01 平・断面図



第31図 V区 SK01～04 平・断面図



第32図 VI区 SK01～05 平・断面図

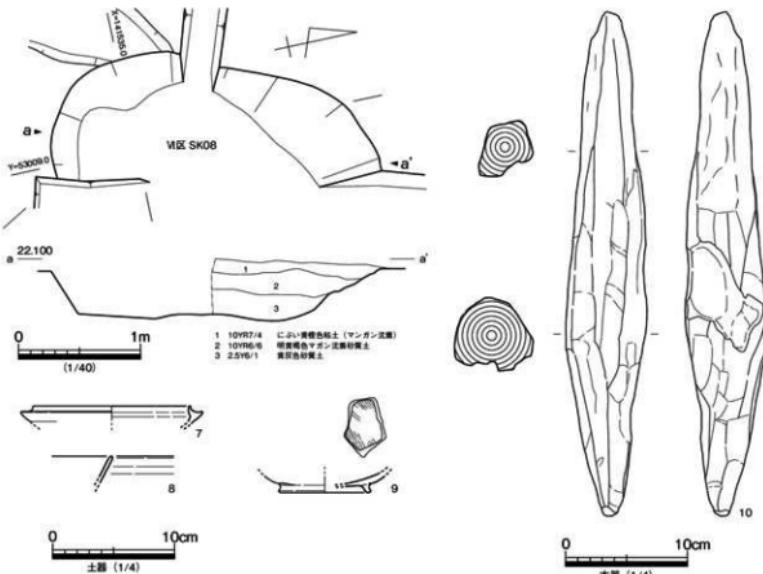
VI区 SK01～05

VI区は調査区ほぼ全域が自然河川域であり、河川以外の遺構はすべて河川埋没層を基盤として掘開されたものである。基盤土は場所によって微妙に異なるがほぼ灰褐色系粘質土にまとめられる。土坑は方形基調のSK01～03と円形のSK04・05がある。SK01・02は暗褐色系粘土に基盤層ブロックが混じる土で埋められており、SK03は黄灰色系砂質土で埋没する。このうちSK03は柱痕を伴う柱穴状の断面が記録されており、耕作にあたっての杭等を設置していた可能性がある。SK04・05は断面U字形で浅く、黄褐色・灰褐色系砂質土で埋積する。調査記録ではこれらの土坑の埋土は「グライ化が進む」とあるので、検出時は還元状態で青灰色を呈していたのかもしれない。基盤層の強い粘性が影響したものと考えられる。

出土遺物は混在の弥生土器・土師器等片少量のみで、所属時期は不明だが、遺構形状と埋土の状況から近世以後の田地耕作に伴う水溜の可能性が高い。

VI区 SK08

上記の土坑と同様の埋土でやや規模の大きな土坑である。直径2.6mの円形で側縁は緩やかに立ち上がる形状を呈す。埋土は黄灰色砂質土が堆積し、最上部は黄褐色粘土で埋没する。この粘土層は近世以後の耕土整地に伴う置き土（第14図上段の11・17・21層）にあたる。したがって当該土坑も近世以後の年代が考えられる。底面から杭片が貼り付いて出土している。これは下層の自然河川に伴う可能性もあるが、主にVII区で出土した木製品が河川の最下層で出土していることからみると、この杭は土坑埋没



第33図 VI区 SK08 平・断面図、出土遺物実測図

時期の近世以後に所属する可能性が高い。

7は受部径 13cm の杯身である。受部が短小で 7世紀中葉の所産。8は口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる 9世紀の須恵器杯である。以上の 2点は遺構の底に貼り付いて出土したものである。9は高台幅径が 7.7cm の黒色土器 B類の碗である。器壁が薄く底部内面に分割ヘラミガキを施し、高台は矩形で裾がやや外に踏ん張る形態。高台径と形態から 10世紀末から 11世紀初頭の東かがわ市西村遺跡 2期（同遺跡 SB104 出土品）に例がある両黒の黒色土器 B類出現時期にあたる。10は芯去削出のクリ材の下端を加工して尖らせた木杭である。残存長 41.5cm、最大径 6.7cm で下端の加工範囲は長さ 15cm である。上端は腐食し滅失する。遺構の底面に貼り付いて出土した。

VII区 SK01

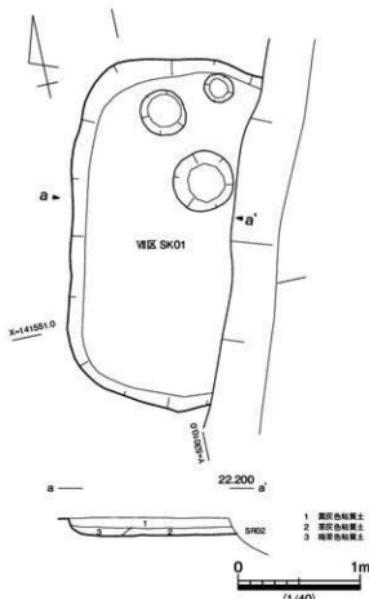
SH01 と同様に自然河川 SR02 の西肩で検出した方形土坑である。隅丸方形で東半分を SR02 に侵食される。底面は平坦で、3基の柱穴の深さは底面から 0.1 ~ 0.15 m と浅い。SH01 と同時期の可能性が高いが、出土遺物は小片のみで実測できる個体はなかった。

VII区 SK02

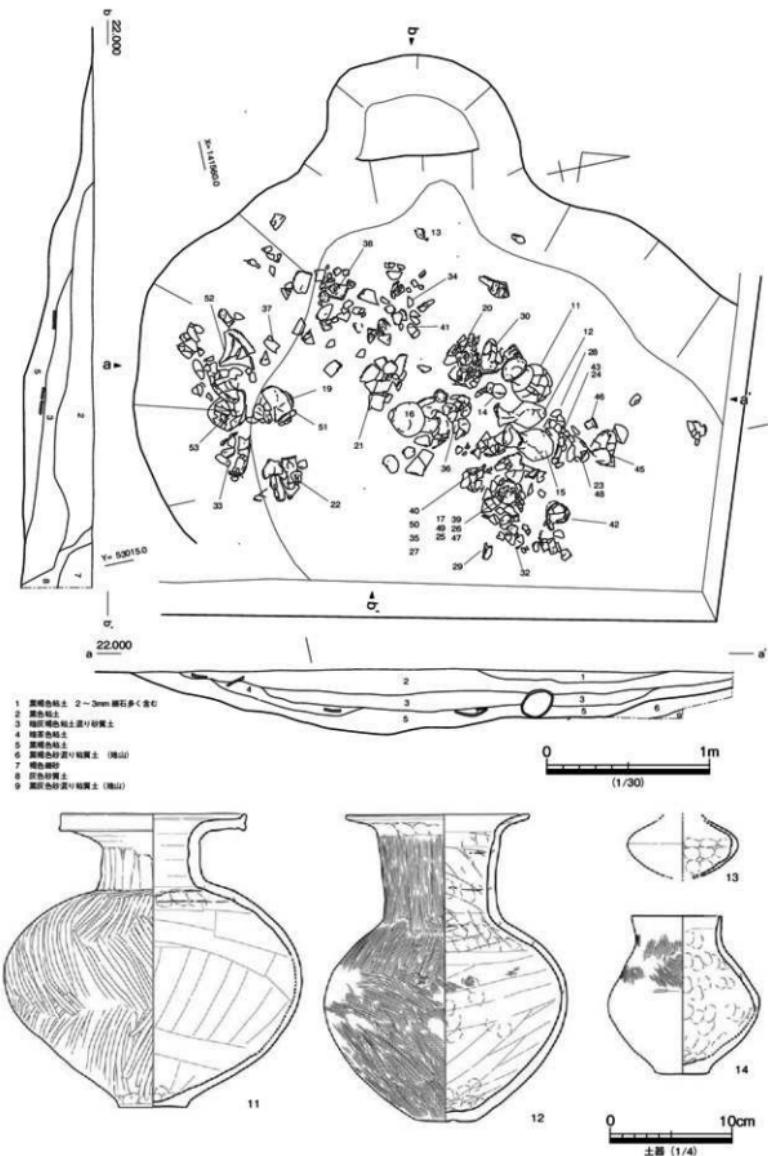
SH01 と同様に自然河川 SR02 の西肩で検出した土坑だが平面形が不定形で、深さが 0.4m とやや深く、断面形は皿状である。埋土は黒褐色系粘土層を基調として砂質土（3層）が間層に入る。砂質土より下位において図示した土器群が出土した。完形かそれに近い状態まで復元できる個体が多く、一括投棄の土器資料として注目できる。断面から SR02 の最終埋没層には切られるが、SR02 存続期のどこかで共存し SR02 から西側に派生する窪みであった可能性がある。

44 点の弥生土器が出土した。壺 9 点、甕 26 点、鉢 6 点、高杯 2 点、瓶 1 点である。

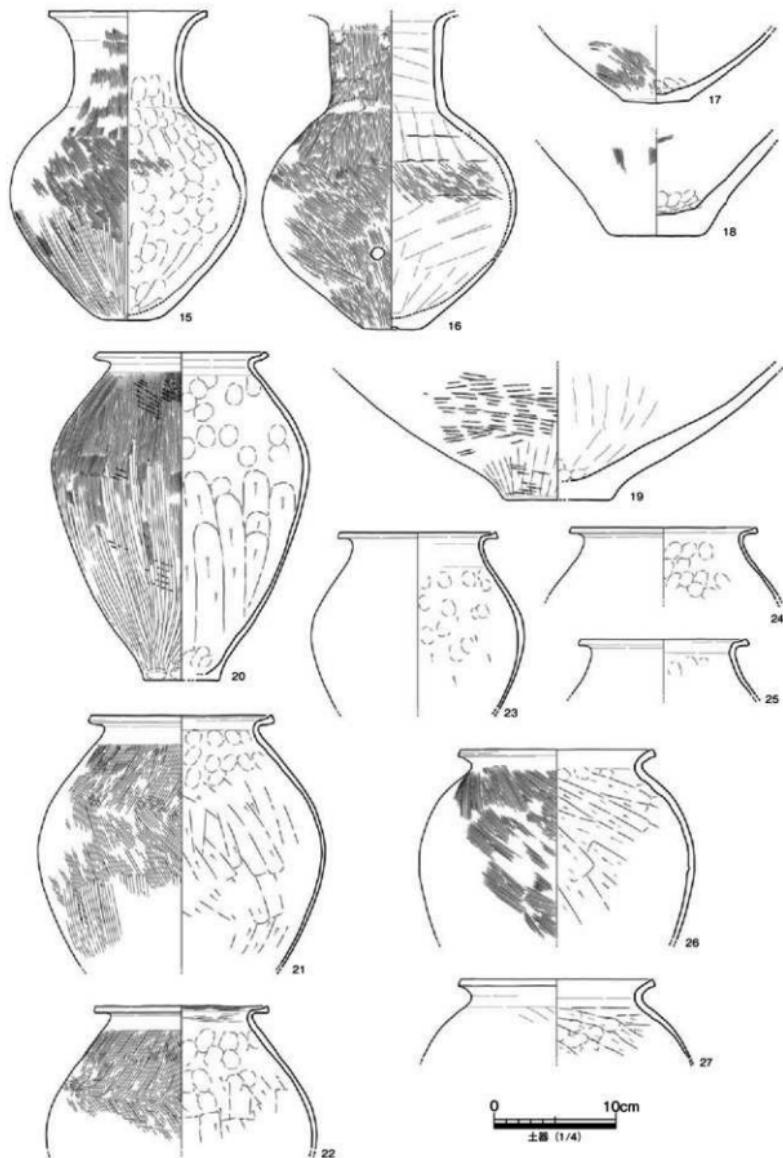
11 ~ 19 は壺である。11は器高 24cm の中形の広口壺で玉ねぎ状にやや扁平な体部に直立する頸部、水平に開く口縁部が付属する。口縁端部は上下に拡張し幅 1.3cm の面をもつ。体部外面は粗い単位のヘラミガキで仕上げ、頸部は継位ナデ、口縁部は内外面ヨコナデを施す。体部内面上半に粘土紐接合痕及びその指押さえを残し下半は幅広く柔らかい板状工具によるナデ仕上げ。底部はやや上げ底気味の平底である。12・15・16は器高 25 ~ 26cm の長頸壺である。いずれも体部中位に最大径をもつ球形の体部に 12 はやや外傾、15 は緩やかな C 字カーブ、16 は直立の頸部が接続する。口縁部は 12・16 が緩やかに屈曲して水平に短く開く形態で端部は丸く收め、15 は屈曲なく C 字カーブのままスムーズに口縁端部に至る形態で端部を面取りする。底部はいずれも平底だが、底縁稜線はいずれも鈍く丸味を帯びる。



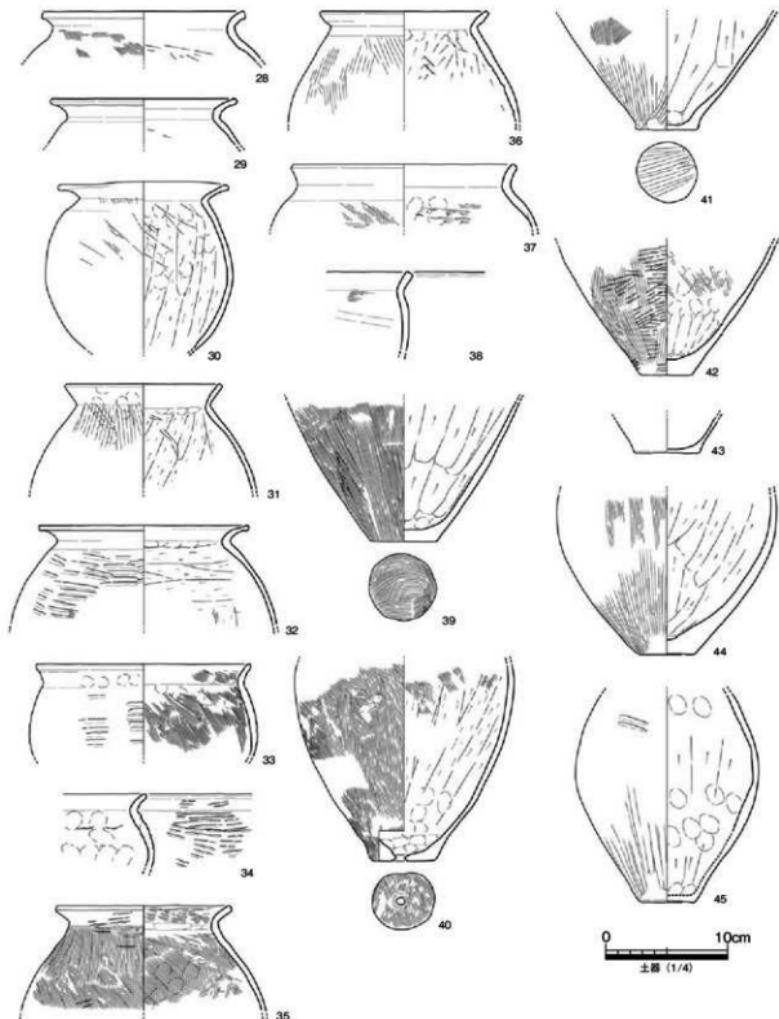
第 34 図 VII区 SK01 平・断面図



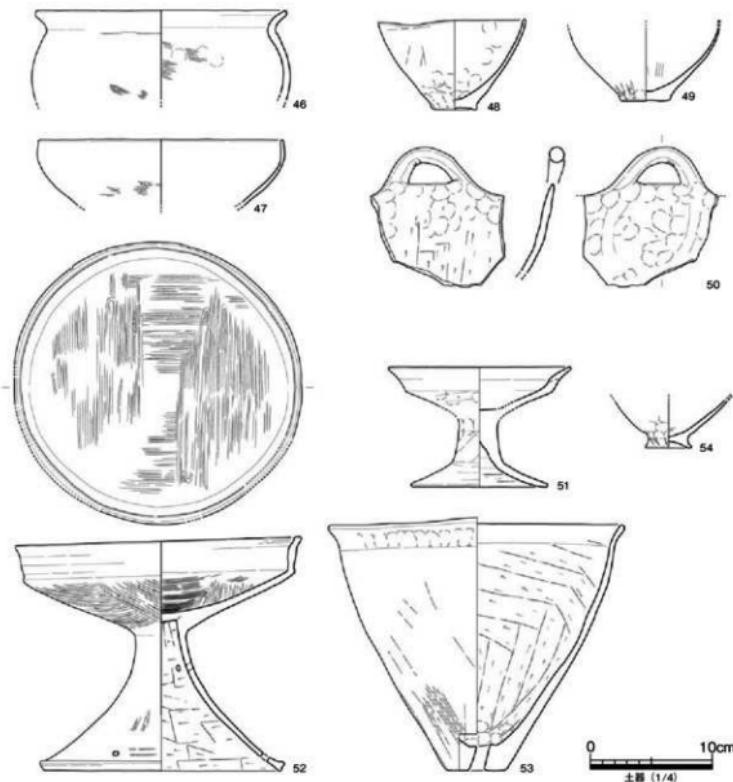
第35図 VII区 SK02 平・断面図、出土遺物実測図 1



第36図 VII区 SK02出土遺物実測図2



第37図 VII区 SK02 出土遺物実測図 3



第38図 VII区 SK02出土遺物実測図 4

器面調整はいずれもハケ目主体で15のみ体部下間に縦位のヘラミガキを施す。16は体部下間に焼成後に直径約1cmの敲打穿孔を施す。17～19はいずれも体部が大きく開く形態の壺底部片である。17は薄手で底面がやや膨らむ形態、18・19は厚い平底である。19は平行叩き成形の痕跡が残る。

20～45は壺である。20～25は下川津B類系で肩が張る体部に口縁部が短く外反し端部を断面三角形状に摘み上げる形態。底部まで残る20は安定した平底である。体部外面はハケ目調整が基調。下地の叩き成形痕がわずかに残る。20は体部下半に定石とおりの縦位ヘラミガキを丁寧に施す。内面下半はいずれもヘラケグリし上半には指押さえが顯著であることも定石とおりである。体部上半から口縁部にかけての細部形態にばらつきがあり、20～22は強い内傾がないまま口縁部屈曲に至っているが、23～25は体部上半で一旦強く内傾した後上への緩やかな外反カーブを経て口縁部屈曲に至る。なお23～25は器面調整が観察できないほど表面が磨滅する個体である。20～22のごとく器面調整を含めた残存状態が良い一群とは埋没状態に相違があるとみるとべきで、一括投棄した土器（20～22）とそれ以前の

遺構外廃棄土器(23～25)が混在したと解釈し、先の細部形態の違いは時間的関係を示す可能性が高い。

26～28は肩が張る体部から口縁部がC字カーブで接続し端部を若干拡張する壺である。口縁部から体部上半は厚手で体部中程は内面を強くヘラケズリすることにより薄く仕上げる。外面は左上りのハケ調整である。29～31は口縁部がくの字に屈曲する形態の壺で、内面は強いヘラケズリが見える。32～34は外面に平行叩き成形痕を残す壺である。内面は横位にヘラケズリするもの(32)とハケ・ナデ調整のもの(33・34)がある。35～38は口縁部が短く屈曲して外反する形態の壺である。細部形態は多様で複数系統が含まれる。39～45は壺底部である。いずれも安定した平底で下川津B類系の41は底面にヘラミガキ、その他の39・40は底面にハケ調整を施す。40は焼成後に穿孔し傾転用する。

46～50は鉢である。形態は多様である。46は壺形態で脚部径が大きいもの、47は薄作りの直口内湾の鉢、48は逆三角形で安定した平底の完形鉢、54は底縁裾が斜め下方に突出して台状となる台付鉢、50は把手付大形鉢である。

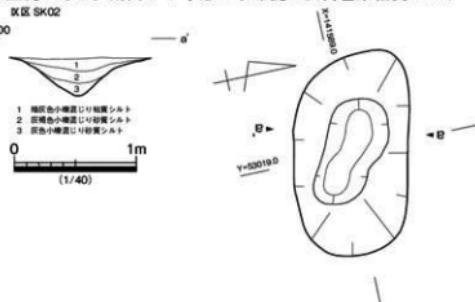
51・52は高杯である。51は脚柱部が中実の高杯で杯部から口縁部へは器形が強く屈曲して外反する形態である。屈曲部は外面の屈曲位置と内面の屈曲位置がずれており、内面は段が形成されているようみえる。52は下川津B類系の高杯である。脚部は3個単位の細い透孔が上下2段に巡り裾は大きく開いて内面は横位のヘラミガキを施す。裾端部は上下に拡張して端面に凹線を1条入れる。杯部は円盤充填で底を塞ぎ内外面に丁寧な四分割のヘラミガキを施す。口縁部は強く屈曲して直立し内外面に強いヨコナデにより凹線文風の窪みを外面に2条、内面に1条を施す。口縁端部は面取りする。

53は焼成前穿孔をもつ壺である。逆三角形の器形を呈し口縁部は緩やかに屈曲して外上方に開く。内面は2段分割して強いヘラケズリを施す。後期後半古相に特徴的にみられる器種である。

以上の土器は土坑一括廃棄の土器として資料的価値は高く壺や高杯の形状から後期後半古相の良好な資料であり、当該土坑の埋没時期を示す。

IX区 SK02

IX区中央やや南よりで検出した長椭円形土坑である。断面がV字形で小疊混の灰褐色系粘質シルトで埋積する。出土遺物はなく所属時期は不明だが、形状が不定形なことから、風倒木痕の可能性がある。



第39図 IX区 SK02 平・断面図

(3) 溝

I 区 SD01～07

I 区西壁沿いに条里方向に北流する溝がSD01・06である。SD06はI c 区拡張部西壁及びI b 区南壁断面（第6図）でSD01に先行する溝であることが確認でき、I c 区でのみ平面プランが確認できる。I c 区南では両溝は緩やかに西にカーブし調査区外に外れる。

SD01は幅1.3～1.7m、断面U字形で深さ最大0.36mの溝である。I 区北端に近いa ラインで底面の標高が20.1m、南端に近いe ラインでは20.35mである。つまり南から北に流下したものと考えられる。SD06は第40図下段のe ラインにおける底面の標高が20.25mとSD01より0.1m低いが、これも北方に向流下したとみて矛盾はない。

埋土はSD01が褐灰色系粘土及び砂質土で埋積する。部分的にe ライン1層のように粗砂による流水層を残すが、基本的には滞水状態を反映する堆積層である。SD06は黄色系砂及び灰白色粘土の互層による流水層で、SD01とはやや様相が異なる。

SD02からSD05は条里方向とは異なる方位をもつ溝である。灰黄色系土で埋積しており、SD02はSD01埋没後に掘削された溝である。I・III区間の現水路・里道の方向にはば並行しており、IX区 SD12とも方向が等しいことから、SD12が所属する14世紀ごろ以降の溝と言える。同様に南端のSD07も条里方向とは異なる。先述したSK01と同様に攪乱土除去後に検出した不定形遺構で、底面は20.3mとSK01と同じである。これもIX区 SD12と関係のある遺構であろう。

これらの溝のうち、SD01で土器が出土したが、それ以外の溝は実測可能な遺物はなかった。

55・56は土師器、57～59は須恵器である。

55は土師器小皿。口径8cm弱、体部中程から強い回転ナデで器形を外反させる。小皿出現段階のもので、11世紀後半から12世紀前半の所産。56は土師器碗である。径6.5cmの高台は扁平で体部外面に指押さえが残る。

57は須恵器皿底部片である。底径約9cmで体部は斜め上方に直線的に立ち上がる形態で外面に火だしきが残る。9世紀の所産。58は頭部が上方に向かって開く形態の須恵器壺片である。頭部外径6.5cm、内径4.5cmで、頭部内面は直線的に立ち上がる。10世紀に所属する。59は須恵器小型杯底部片である。底径が4cm弱で底面はヘラ切り後に回転ナデ調整を行う。同様の小型品としては、前田東中村遺跡E区 SD19の391黒色土器碗や多肥北原西遺跡 SD0501の264縁輪陶器がある。

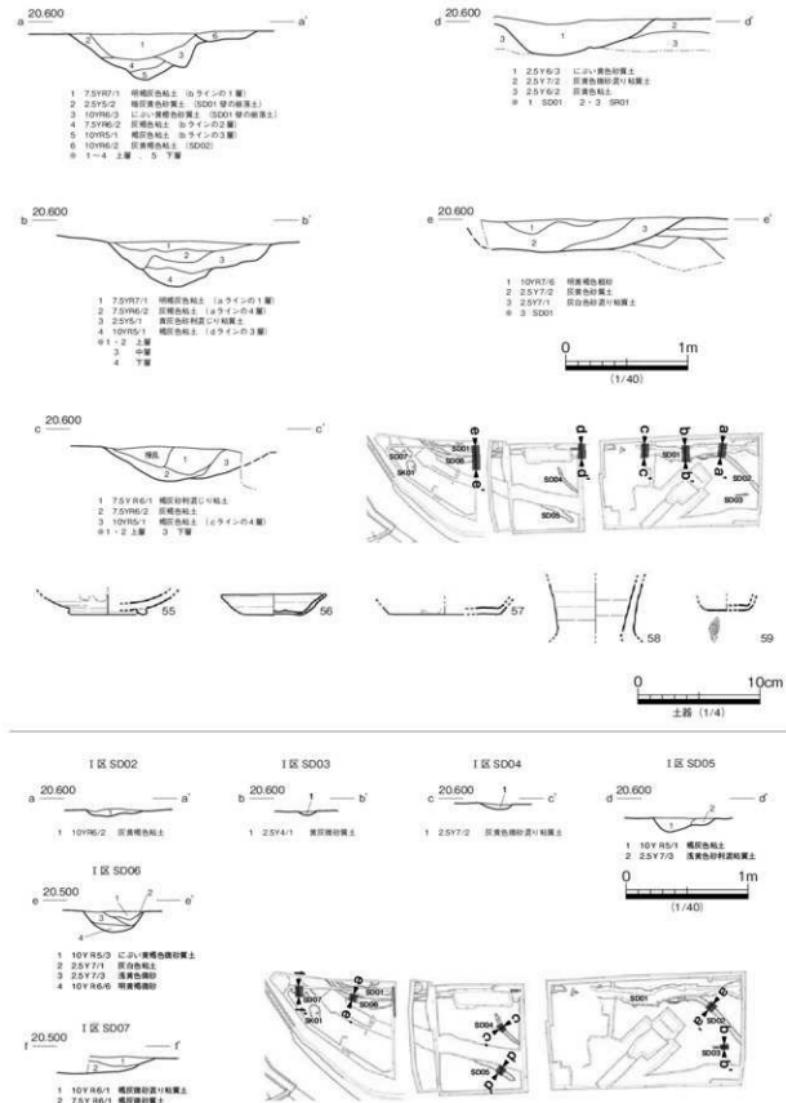
以上の土器により、12世紀前半までにI区 SD01は埋没したと考える。それ以外の溝については、それ以後の時期が与えられる。

III区 SD05～08

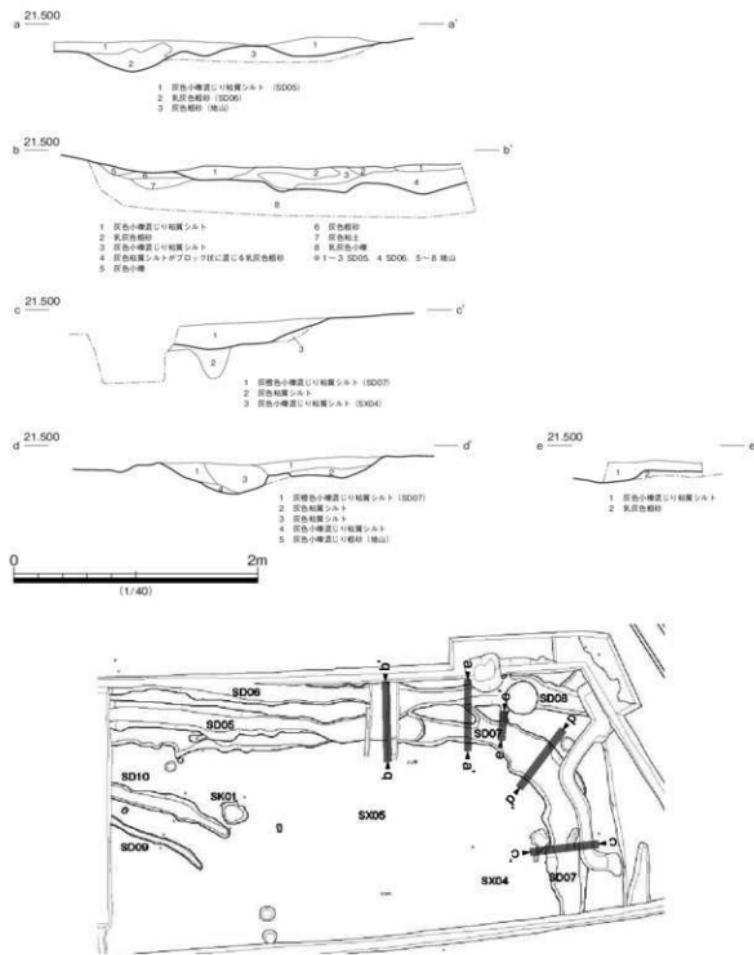
III区において条里方向に走行する数回にわたって掘り直された溝群である。西壁際を北流するSD05・06がIII区北側で東に折れSD07として東へ流下する。SD08はa ラインから北でSD05・06から分岐し北端で搅乱に削られる。SD05はSD06がある程度埋没した後に掘り直しされる。溝幅は場所によって異なるが、1.3～2.0mで深さは0.2～0.3mと浅い。埋土はSD07が主に粘質シルトで埋積し、SD05・06は一部(a ライン2層・b ライン2層)に粗砂を含みながら粘質シルトで埋積する。

出土遺物はSD08で出土したのではなく、すべてSD05～07で出土したものである。

60・61は土師器、62～66は須恵器、67は土錐、68・69は石錐である。

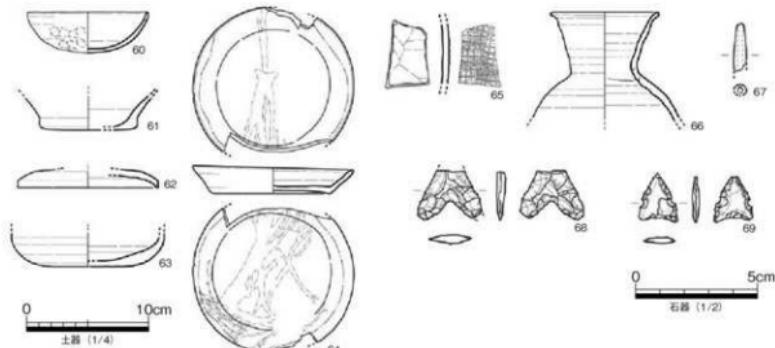


第40図 I区 SD01～07 断面図、出土遺物実測図



第41図 III区 SD05～08断面図

60・61は土師器鉢・杯である。60はボウル状の鉢で器壁が3～3.5mmと薄い。このような極薄の鉢は、必ずしも一般的ではないが、下川津遺跡SH III 07(418図29・30)、同遺跡第一低地帯流路2(56図3～5)、中間西井坪遺跡II谷7最上層876・877などに例があり、口径12cm以下の古墳時代タイプの須恵器蓋杯が伴うことから、平城I(6ABY・6ABX区溝SD1900下層)や県内では打越窯の後半時期とされる8世紀初頭に位置づけられる。61は土師器杯である。底部が段状高台を呈し体部が直線的に外開きとな



第42図 III区 SD05～07 出土遺物実測図

る。10世紀後半から11世紀後半に属す。

62は8世紀代の杯蓋、63は8世紀前半の杯身、66は11世紀後半の壺である。体部上半から頸部にかけての器形反転部の綾さは前田東中村遺跡E区SK05出土品に類似し、十瓶山西村2号窯と1号窯の中間的形態にある。64はほぼ完形の皿。直径約13.3cm、器高2～2.3cmで、やや焼け歪む。内外面に焼成時の火だしきが残る。また、口縁部に約1cm幅で炭素吸着がある。底部は回転ヘラきり後に丁寧なナデ調整を行い、やや上げ底気味の断面形を呈す。9世紀初頭から前葉にかけて（平城宮SD650期）の資料には口径15cm未満の皿はなく、県内では9世紀後半の資料から形式分化し小形の皿が出現する。なお、都域では小形の皿は出現していないので、地方においてのみ分化した器種である。9世紀後半に該当する。65は格子タタキの壺部片である。

67は管状土錐である。68・69はサスカイト製石錐である。68は先端欠損だが全形を復元すると3.0cm以上と考えられる。凹基式である。69は微細な剥片の周縁のみを加工した平基式石錐である。長さ2cmサイズの小形品である。

以上により、SD05・06は11世紀後半を下限とする埋没が想定される。ただし、SD06で出土した63の8世紀前半の杯身から、SD06はそれまでには埋没しているとみられる。

III区 SD09～11・19・23

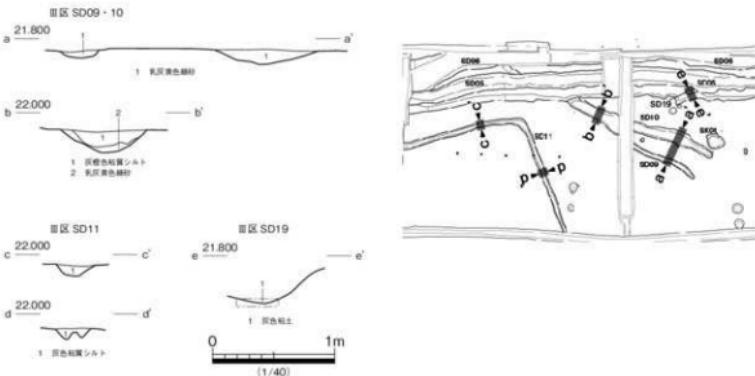
III区の溝のうち条里方向に合致しない溝群である。SD09・10はSD05に切られ北東方向に流下する溝で灰橙色～乳灰黄色細砂層で埋積する。古墳時代の溝の可能性がある。

SD11は灰色粘質シルトが埋積しており、IV区SD07と同一溝である。IV区溝の重複関係から12世紀前半と推定される。

いずれも出土遺物はなかった。

IV・V区 SD01・02

IVからV区にかけて条里方向に走行する溝である。SD01が下位、その埋没後にSD02が掘開されて



第43図 III区 SD09～11・19断面図

おり、V a・V b区では同一溝の上下層関係にある。III区 SD05がIV・V区 SD02に、III区 SD06がIV・V区 SD01に対応する。

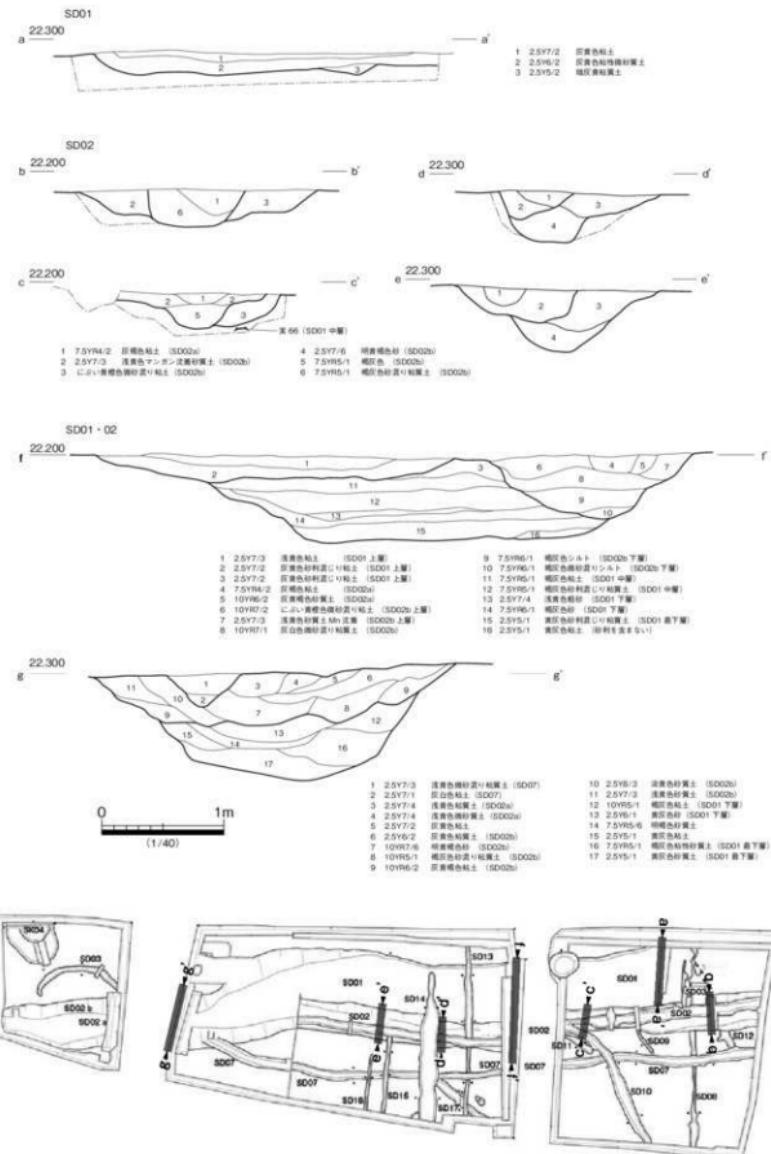
下位のIV・V区 SD01は最大幅4.1m、深さ0.9mで溝底の標高を比較すると、f・gラインで21.5mで同一溝のIII区 SD05・06ではIII区南壁（第11図）で21.3mである。僅かだが南から北への傾斜があるので北に流下したものと考えられる。埋土は上位のSD02が粘性土で埋積するのに対して、下位のSD01は粗砂層を含む流水痕跡をとどめて埋積する。III区に共通する堆積状況である。SD01では最下層・下層・中層・上層に区分して土器が取り上げられている。

層位、出土位置別に提示する。

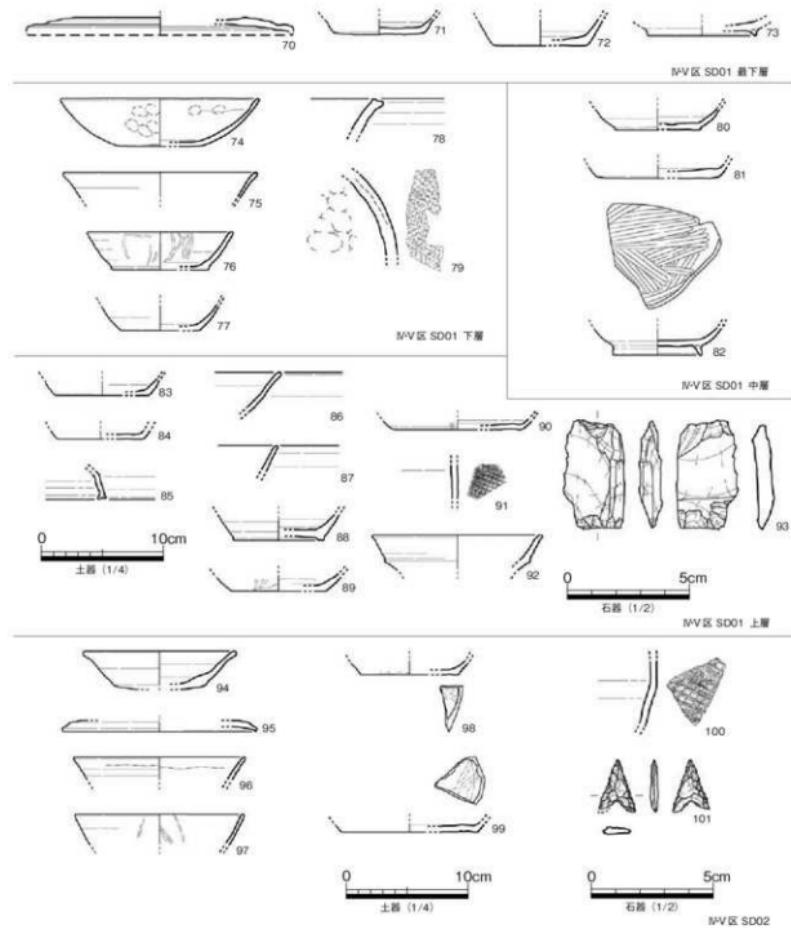
70～73は最下層出土の土器である。70は須恵器杯蓋で下端径22.0cmと大形である。平城宮出土の須恵器は平城I（TK48型式）から平城II（MT21型式）にかけて杯の口径が20cmを越える一群が多出する。当該個体は端部形状が「へ」字状となっており、平城II式（8世紀前半）に所属する。71・72は須恵器杯底部片である。いずれも底部は回転ヘラ切りしナデ調整を行い平底とし、体部は斜め上方に直線的に開く形態である。71は灰白色系で微砂粒を含むザラツキのある胎土で内面見込みに黒化した重ね焼き痕が残る。72は暗灰色系で精良粘土を使い外面に火だすきを残す。9世紀後半～10世紀前半の所産。73は黒色土器の碗高台部片である。内黒のA類で高台は断面三角形で細く径が9cm弱と大形である。畿内III類の浅椀型（森1995）で10世紀後半を下限とする。

74～79は下層出土の土器である。74は土師器杯で体部が内湾気味に大きく開き浅椀形を呈して底部は稜線不明瞭な底線を経て平底を呈す。薄作りだが回転台成形の痕跡に乏しく、指押さえ痕が多い。明言できないが10世紀前半に属する可能性が高い。75は口径が16cmある土師器杯口縁部片である。極端に薄く器表面に磨減が及ぶ。76・77は須恵器杯身である。76には顕著な火だすきがある。78は口縁部が拡張する須恵器壺口縁部片である。79は外面に偽格子叩き成形がある。

80～82は中層出土の土器、そのうち82は出土位置記録がある。80は土師器杯底部片である。直径7cmの底面は平坦な回転ヘラ切り面で側縁に円盤高台状の段が形成される。11世紀後半。81は須恵器杯底部。82は高台径7.4cmの黒色土器A類碗で深碗タイプである。11世紀代であろう。



第44図 IV・V区 SD01・02断面図



第45図 IV・V区 SD01・02出土遺物実測図

83～93は上層出土の土器・石器である。83～88は須恵器で杯を主体とする。9世紀後半から10世紀、86は土師器碗である。11世紀後半以降。93はサヌカイト製の楔状石核である。上下縁に敲打打撃による剥離面があり、側縁は裁断面が残る。小形石器の石核または素材である。

94～101はSD01埋没後に掘削されたSD02出土の土器である。94は土師器杯で底部が膨らむ形態で11世紀前半。95～98は須恵器杯、重ね焼き痕や火だしきが残る。99は須恵器皿である。100は格子叩きを施す須恵器壺体部片。101はサヌカイト製の凹基式石鎌である。縁辺に微細加工を施す。

以上の出土遺物のうち当該溝の埋没年代を示すのはいずれも11世紀代に所属する中層出土の80の土師器杯及び82の黒色土器で埋没開始の上限を示す。最下層・下層には10世紀後半を下限とする遺物が含まれていることから、10世紀後半から11世紀までの間に堆積が進行し、11世紀後半までに埋没が完了したことがわかる。掘削時期は分からぬが70は8世紀代に遡る資料でありそれ以前から掘開状態にあったとみておきたい。上位のSD02の埋没時期を示す遺物はないが、Ⅲ区例を参考にすると11世紀後半以後で12世紀前半までに埋没したものと考えられる。

IV・V区 SD03・07～11・13～15・17

条里方向の基幹的な溝であるSD01・02以外の溝である。IV区SD03は条里の東西方向に走行する溝でIV区SD08と同一溝である。SD01埋没後に掘削され、SD02開削前には埋没する。

10世紀後半の須恵器が出土するがSD01の混在品であろう。同一時期でSD13も該当する。

SD07はSD02の最終埋没である12世紀前半以前の溝でⅢ区SD11に接続する。SD14～16はすべての溝を切っており、中世以後である。

102は須恵器杯である。体部下端が下方に屈曲して平底底部に続く。103は須恵器壺で口縁部形態が66に共通し11世紀後半に所属するものとみる。102はSD01からの混在である。103はSD13の時期を示す。SD17は他と異なり黒褐色粘土で埋積する。VI区の条里方向と異なる溝群の一部によく似ており、古墳時代後期の可能性がある。

VI区 SD02・04・06・09・10・11

VI区SD02・03・11は古墳時代前期以前の自然河川SR01埋没後に掘開され、古代の自然河川VI区SR03の西肩に所在する条里方向と異なる溝である。埋土は暗褐色・黒褐色の粘質土を埋土とする。SD11から古墳時代後期の須恵器が出土し所属時期を示す。

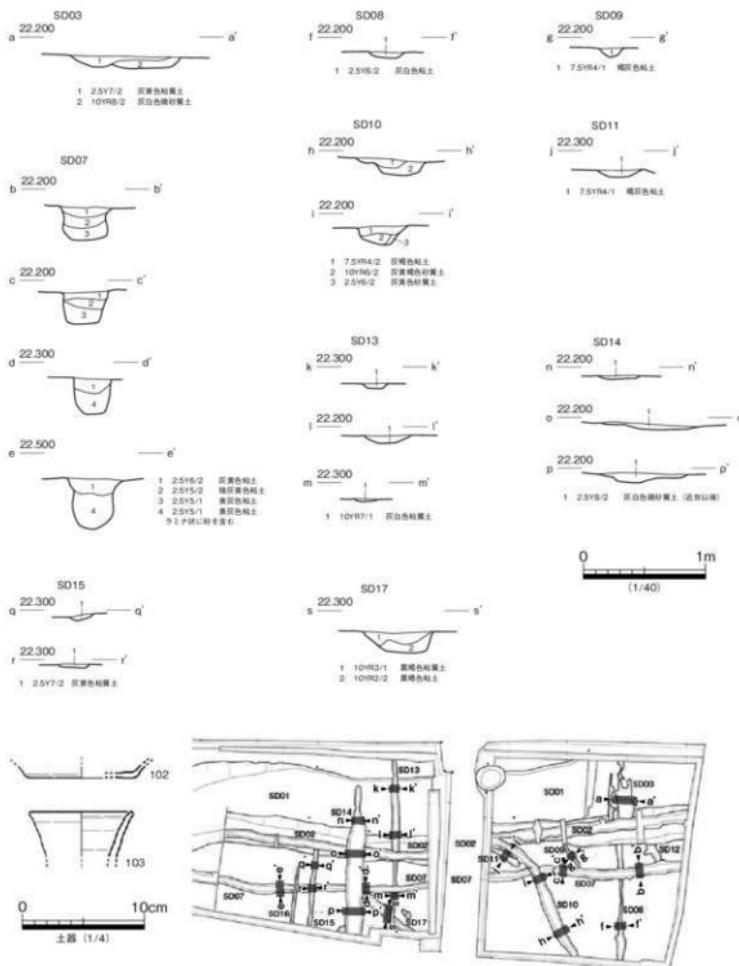
VI区SD04・06・07・09・10は古代の自然河川VI区SR03埋没後に掘開された条里方向と異なる方向の溝である。12世紀前半を上限とする。

104はVI区SD11出土の須恵器高杯である。7世紀前半の所産。

VII区 SD01・02

VII区SD01は調査区北側で北西方向に直線的に流下する溝で、IX区SD17に接続する。延長15mを確認した。IX区SD18からIV区SD17につながる溝ラインに並行する。SD02は古墳時代初頭の竪穴建物としたVII区SH01に接して掘開されたし字に屈曲する溝である。暗灰色粘質土で埋積する。SH01に関係する遺構と考えられる。

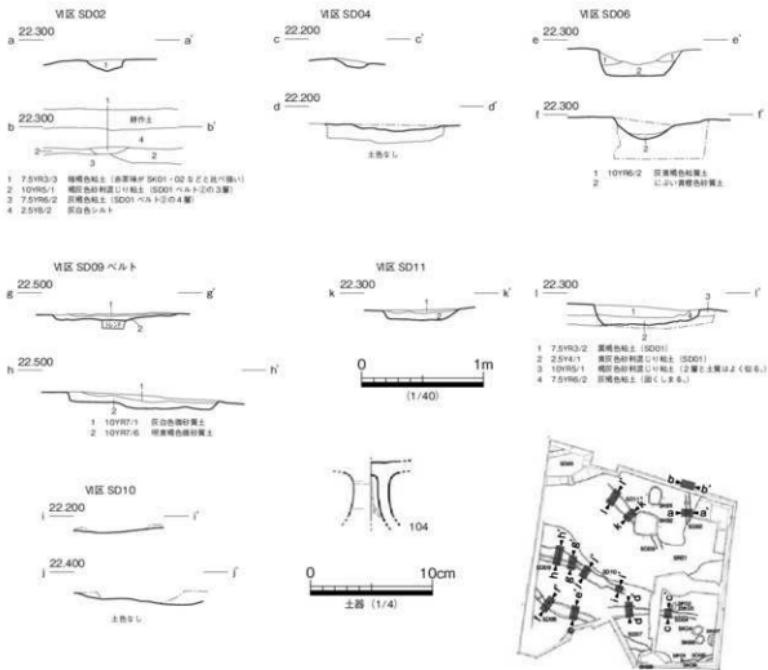
SD01から弥生土器・土師器が出土した。105は弥生土器壺である。底部は平底で外面は叩き成形痕をハケ目調整で消す。内面は横位ヘラケズリである。106は弥生土器高杯脚部。下川津B類系で裾を肥厚させ端部を面取りする。下端から2cm上の位置に小穴2個を単位とする透孔を配する。107は土師器広口壺口縁部である。一部内湾気味に大きく開き、端部を上下に大きく拡張する。胎土は茶褐色系で角閃石を含む。



第46図 IV区 SD03_17断面図、出土遺物実測図

VII区 SD01・02・03・04・SX02・VI区 SD01

VII区は大部分が自然河川域だが、北西側の一部でVI区南西端やIV・V区から続く条里方向の溝群が確認できる。VII区では条里方向の溝を3本に区分し、上位からSD01・SD02・SD04として調査した。最上位のSD01は主に砂質土で埋積し、SD02は埋土下半で粘質土が堆積、最も下位のSD04は主に砂質

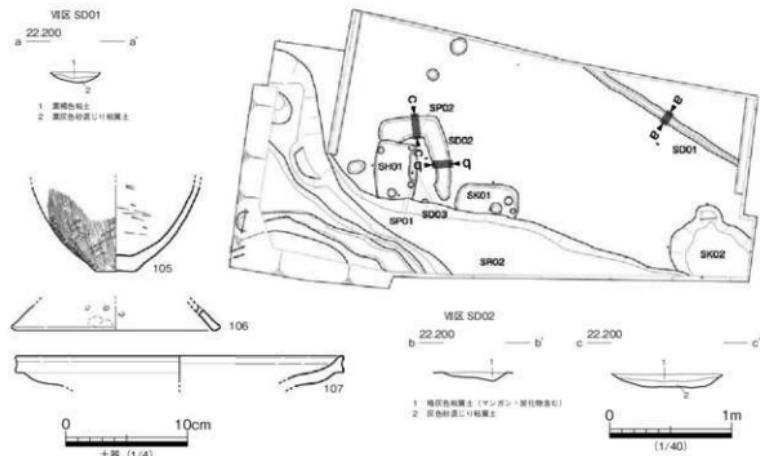


第47図 VI区 SD02・04・06・09・10・11断面図、出土遺物実測図

土で埋積する。第49図で示したように、調査区北壁断面ではSD01の底面標高は22.008m、SD02は21.9m、SD04は21.445mである。これは先述したIV・V区のf・gラインにおけるSD01上層底面標高、SD02底面標高、SD01下層底面標高には対応し、2回の掘り直しが当該調査区でも確認できる。

図面ではこれらの溝群は古代に埋没したSR02に切られるように示されているが、実際にはSR02は上面の十分な精査を行わず重機で掘り下げたために、溝群と河川堆積層との関係が不明となったもので、明確にSR02がこれらの溝群に後出する訳ではない。VI区のSD09・10は当該VII区SD03に接続するが、VI区ではSR03埋土を確實に切っているにもかかわらず、当該VII区では同じ河川であるSR02に切られたように表現されており切り合いに矛盾がある。十分に精査が行われなかつたことがここにも示されている。

とはいっても、VII区の中央部の東西トレーンや調査区南壁断面において溝との関係性を点検した結果、南壁断面（第49図）では図の西端付近、中央トレーン断面では断面中央やや西寄りで溝状の窪みがみられることが分かった。第49図では南壁断面の該当箇所を抽出して再掲している。この1層がSD01、2～6層までが高さから見てSD02に対応するものと考えられ、その下位は河川が埋没する過程で次第に溝状の窪みが形成された形跡を読み取ることができる。SD04堆積過程においてはSR02とSD04が同



第48図 VII区 SD01・02断面図、出土遺物実測図

時に埋没する局面があったと考えられる。その埋没途上か一旦埋没した段階で、SD02が掘削されその段階ではSR02は大部分が埋まり、西肩に沿って溝状の流路が継続していた。Ⅶ区南壁では溝に継続する窪みの位置はすでに条里方向から東に逸脱しており、自然河川の流筋に影響された状況である。このことから、SD04の段階ではⅦ区のSR02河川域、または北側のⅥ区SR03河川域において水位を調整するための井堰等の施設が存在し、調査区付近の河川が埋没した後には取水口が南に移動し、河川西肩沿いの溝からSD02に給水されたとみられる。

この想定が正しければ、Ⅶ区SR01の底面標高は20.0mよりやや低いので、最大高さ1.5mほどを井堰によりダムアップしてSD04へ給水し、溝はⅢ区SD07の屈曲部に至るまで約100mを条里方向に直線で北流していたことになる。

なお、SX02とした部分はaライン断面の側溝付近の堆積層を示しており、SD02に相当する。

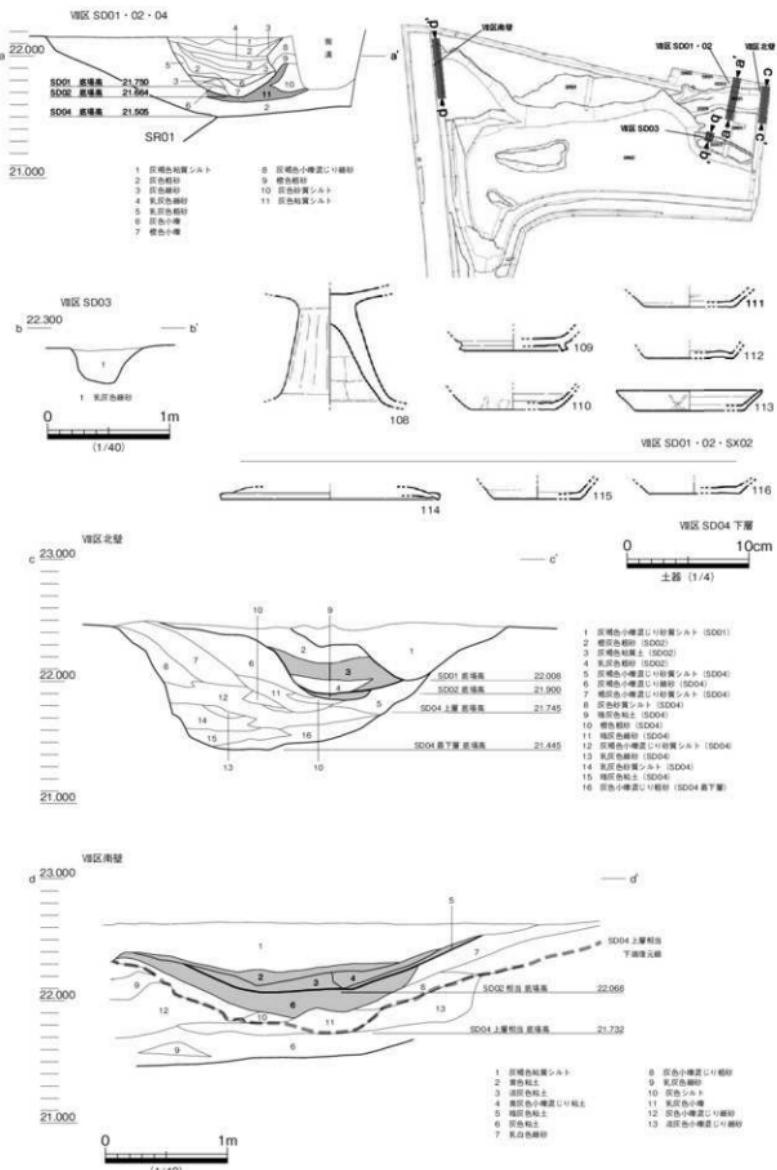
108～113はⅦ区SD01・02・SX02で出土した土器である。108は弥生土器高杯で大形の脚柱部である。109～113は須恵器で8世紀から9世紀後半までの時期幅がある。114～116はSD04下層の土器である。8世紀前半から9世紀後半までの時期幅がある。

IX区 SD12・拡張

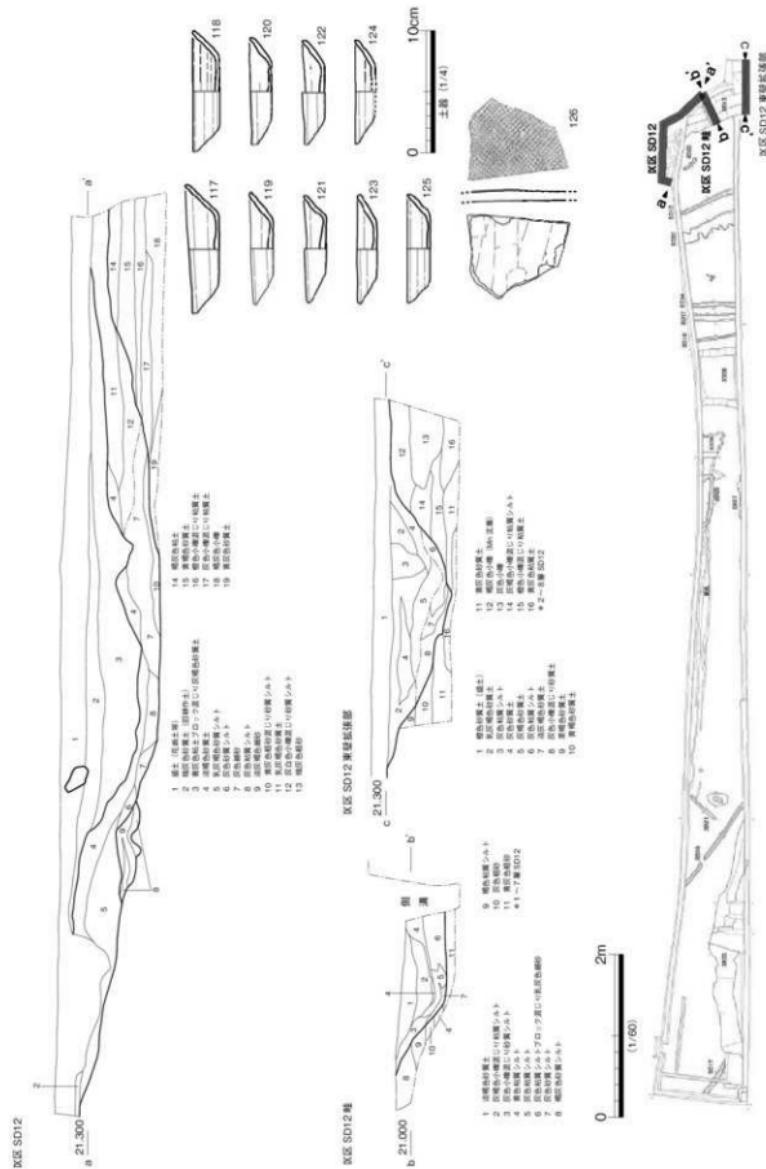
IX区北端で検出した非条里方向の溝である。幅3.5m、深さ0.8mで断面形は緩やかなV字形を呈す。粘砂互層で堆積する。最下層付近で土師器小皿がまとまって出土した。祭祀的な意図が窺える。

117・118は土師器杯である。117は口径が10～10.5cmで器高は2～2.3cmで底部は回転ヘラ切りによる。119～125は口径10cm以下の小皿である。口縁が大きく外傾して開く。端部をやや上方に挿み上げ、内外面を回転ナデ。14世紀前半の土師質土器皿である。126は格子目叩きを施す龜山系陶器壺である。

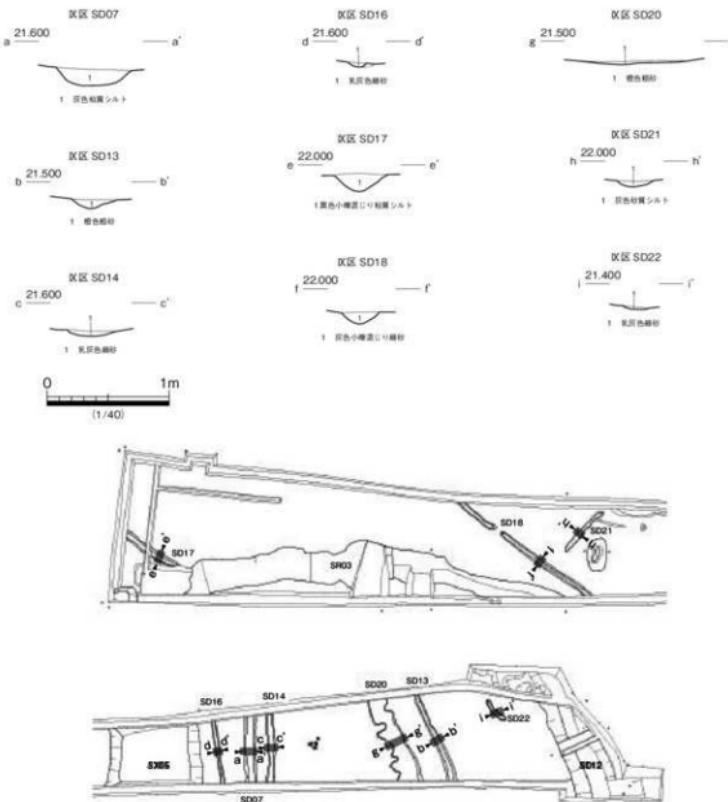
条里間連溝は11世紀後半を最後に埋没し、現況の乱れた地割りに沿ったSD12が東から西に向けて流



第49図 VII区 SD01・02・03・04・VI区 SD01断面図、出土遺物実測図



第50図 IX区 SD12断面図、出土遺物実測図



第51図 IX区 SD07・13・14・16～18・20～22 断面図

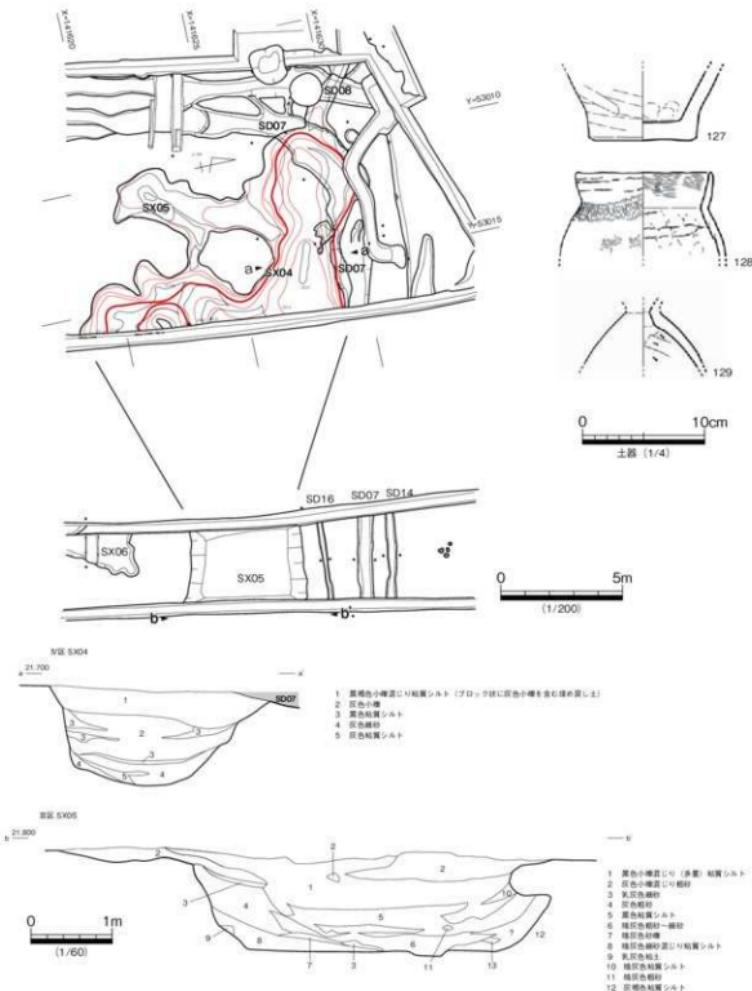
下する形で機能を継承し、14世紀前半を最後にSD12も埋没した。

IX区 SD07・13・14・16～18・20～22

IX区のSD12以外の溝を一括して掲載した。既述のようにSD17・SD18は平行する2条の溝でSD17は古墳時代前期初頭を下限とする溝である。SD18はIV区のSD17から接続する溝でIV区ではすべての溝に切られており、古い時期に所属するとみて矛盾はない。

北側の小溝群はIII区SD07から接続する溝としてSD07があり、灰色粘質シルトで埋没する。南北に接してSD14・16があるが、III区では対応溝はない。その他のSD13・20はSD12に並行しており同時に存在の可能性が高い。SD13の北側下端とSD12の南側下端の間隔は6mである。

いずれも実測可能な出土遺物はなかった。



第52図 III区 SX04・IX区 SX05 平・断面図、出土遺物実測図

(4) 不明遺構

III区 SX04・05 及びIX区 SX05

III区からIX区にかけて、条里方向の溝に切られて黒褐色粘質シルトを埋土とする低地域SX04・05が広がる。まったくの不定形で自然後背地の窪みに見えるが、東側ほど側縁が急な立ち上がりを示してい

ことから、自然の窪みに手を加えたものと考えられる。手を入れた目的はⅢ区 SX05が溝状を呈し、底面標高が20.35 mとⅢ区 SX04と比べ5cmほど低くなっている。また埋土がⅨ区 SR03に共通することから、調査区の東隣接地に想定される SR03に向かって流下する出水（自然湧水）状の水源遺構と推定する。

127は弥生土器壺底部である。厚い底部と底縁部の横方向の調整痕跡から弥生前期末ごろの壺とみる。128は古墳時代の土師器壺、129は古墳時代初期の土師器器台の脚台部である。

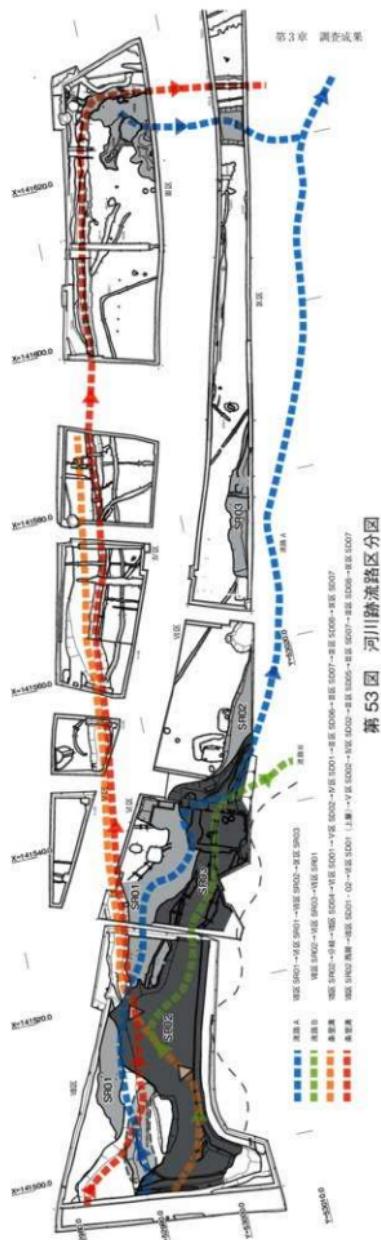
以上により SX04・SX05は SR03と同様に、古墳時代後期ごろに埋没した遺構であり、出土遺物は条里関連遺構の開削時期の上限を画するが、現時点では出土遺物が少なく明確ではない。

（5）河川跡

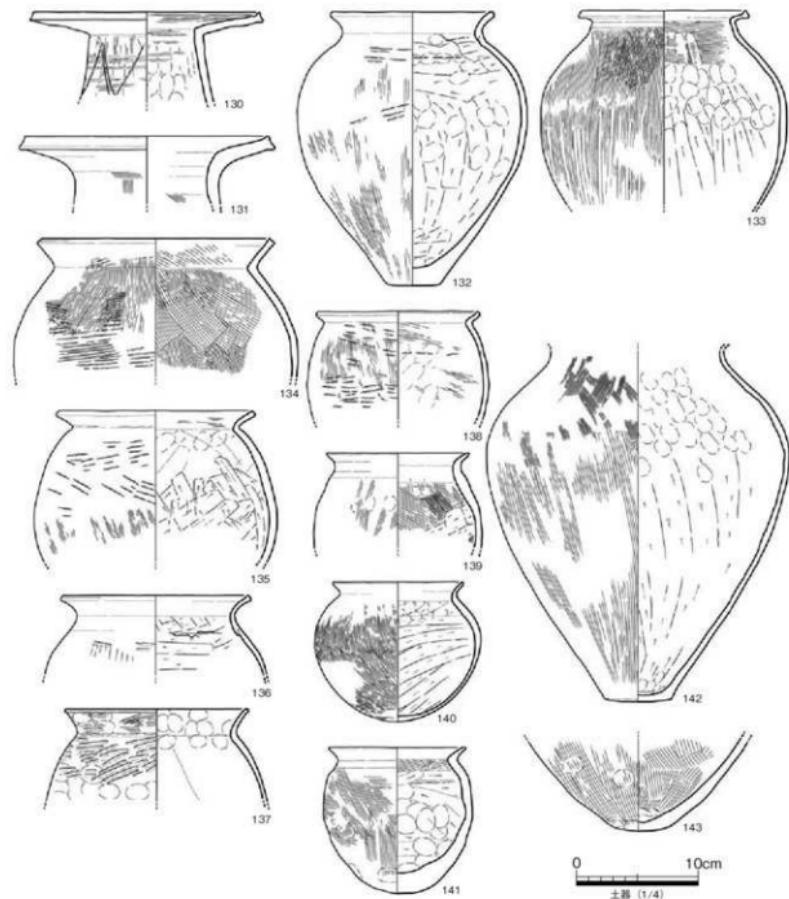
調査範囲の南半部において南から北東方向に流下する自然河川を複数の調査区で検出した。発掘調査時には調査区毎に個別に遺構番号（SR）を付与していたが、整理段階で最終的に判断した河川の流れは次のとおりである。

第1節で説明したように南から北東への河川筋は大きくわけて流路A・Bの2条がある。流路AはⅦ区 SR01→Ⅵ区 SR01→Ⅶ区 SR02→Ⅸ区 SR03とつながる流路筋で、南から流入し北東側の調査区外へと流下する。前項で説明したⅢ区 SX04・SX05は埋土と出土遺物からみて東側の調査区外でこの流路Aに合流することが推定できる。第53図では流路筋を青色で表示した。流路Aの埋土は主に黒色系の粘砂互層で、弥生時代後期から古墳時代後期までの遺物が出土する。

流路BはⅦ区 SR02→Ⅵ区 SR03→Ⅶ区 SR01と続く流路筋で、南から流入し北東側の調査区外へと流下する。第53図では流路筋を緑色で表示した。暗灰色系の粘砂互層で埋積する。河川底から8世紀代、埋土上部から11世紀代の遺物が出土している。先述した南北方向の条里溝群と併存する流路筋である。



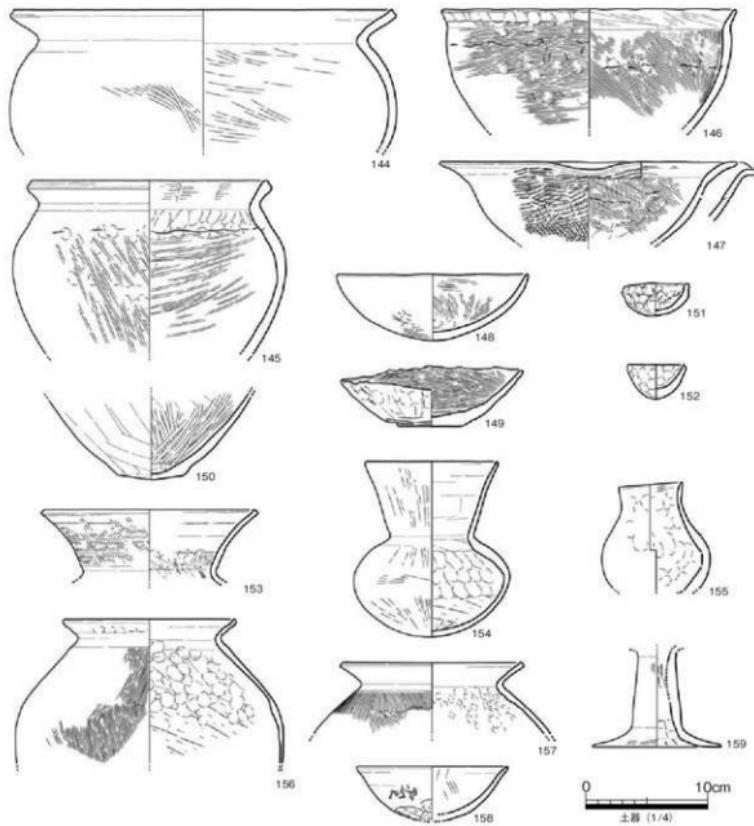
第53図 河川跡流路区分図



第54図 VI区 SR01 出土遺物実測図1

る。ただし、Ⅵ区南壁断面で条里溝に対応する溝状の窪みが流路Bの埋土を一部切るように認められることから、流路の埋没時期は条里溝の埋没より古く、調査区付近では早くに湿地状態となっていたようである。

以上の流路区分を第53図に示した。ただ調査中にこのような流路区分が明確だったわけではなく、出土遺物の取り上げには少なからず混乱がある。その状況を含めて調査区ごとに説明する。

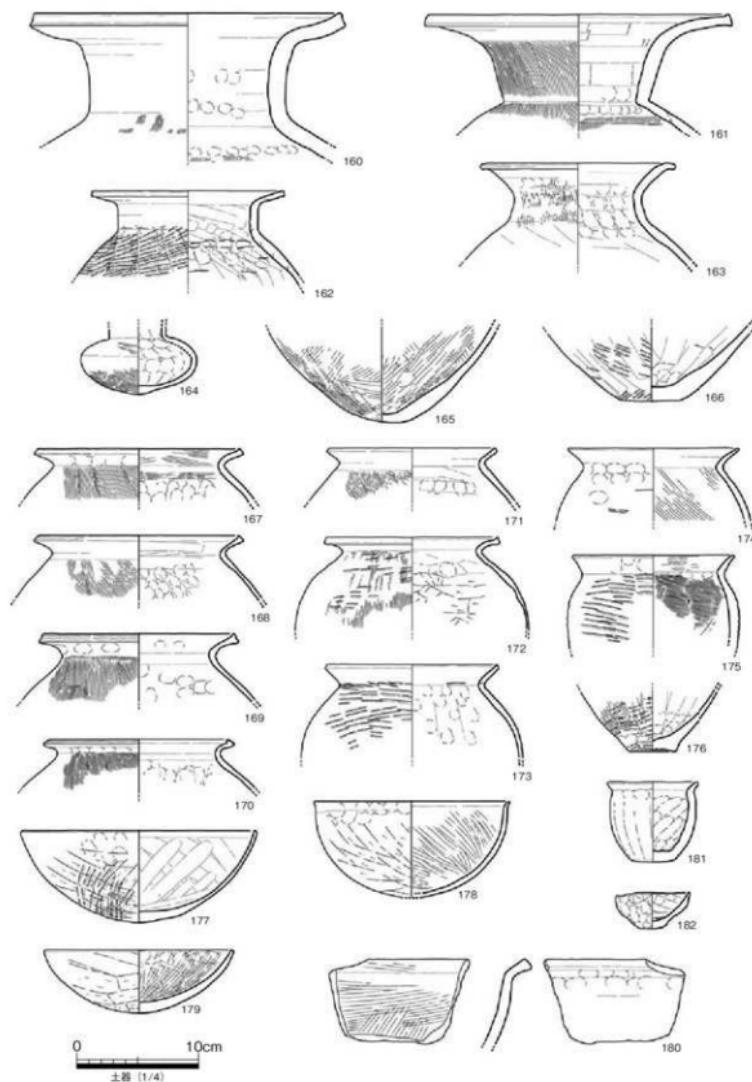


第55図 VI区 SR01 出土遺物実測図2

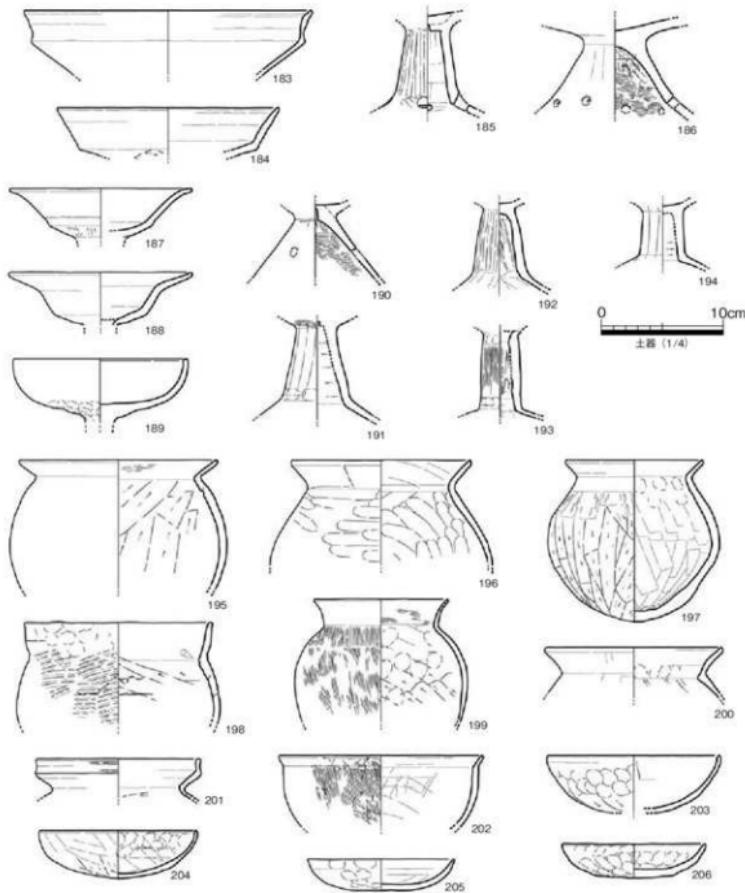
VI区 SR01

全体流路Aに所属する。調査区の西側の大半がSR01の埋土で、条里溝SD01に切られる。弥生時代後期後半から古墳時代前期までの遺物が出土した。上下層に区分して取り上げられているが、土器相は時期差を反映していない。

130・131は弥生土器壺である。直立気味の頸部から口縁部が大きく開く形態で口頸境は130が明確に屈曲し131は緩やかなカーブを呈す。132～143は弥生土器甕である。132は底部が厚めの平底で肩が張る倒卵形の体部から緩やかなカーブを介して口縁部が外反する完形の甕である。内面は全面にヘラケズリを施す。133～142は肩が張る体部から頸部が内傾し口縁部が短く屈曲して端部を肥厚して上方に摘み上げる形態で、底部は142ではやや膨らむ平底で器壁は全体的に薄い。外面は刷毛目調整後に下半をヘラミガキ調整し、内面は下半をヘラケズリ、上半に顯著な指押さえを行う。茶褐色系胎土の下川



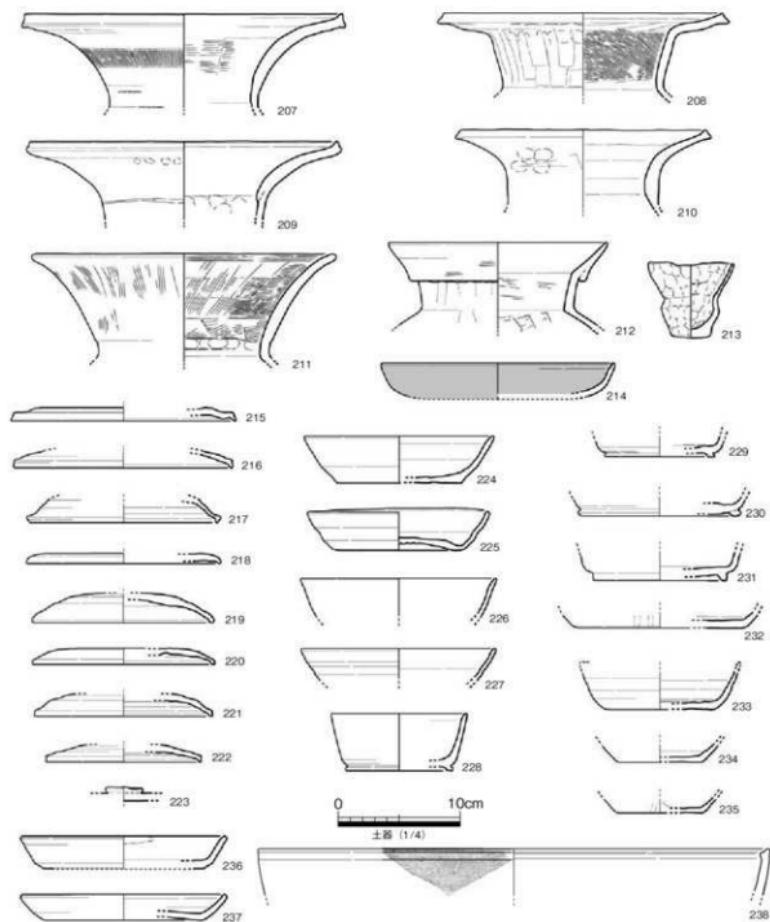
第56図 VII区 SR01・SR02出土遺物実測図1



第57図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図2

津b類系土器だが、142は胎土中に角閃石は含まない。134～138は叩き成形の甕で叩きの後に刷毛目調整を施すものが多い。139～141は小形甕である。144～151は弥生土器鉢である。口縁部が「く」の字に外反するものと直口のものがある。145・146は内面にヘラミガキを施すことから鉢に含めた。147は叩き成形の鉢で口縁部が片口となる。151・152は手づくねのミニチュア鉢である。

153～159は土師器である。153～155は壺である。153は口縁部が若干外反しながら斜め上方に開く形態で体部は球形を呈すものと考える。154は玉葱形の体部に斜め上方に直線的に開く口縁部がつく形態の壺である。155は体部と口縁部が不明瞭な小形壺である。156・157は内面上半に顯著な指揮さ

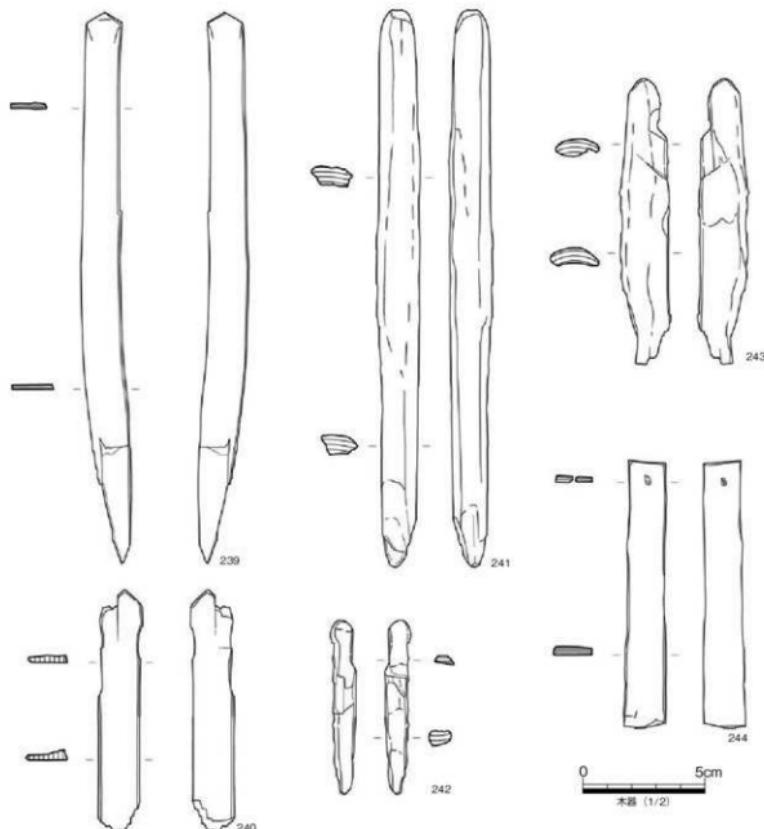


第58図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図3

えを施す壺である。158は小形の鉢、159は脚柱部が円筒形となる高杯である。

VII区 SR01・SR02

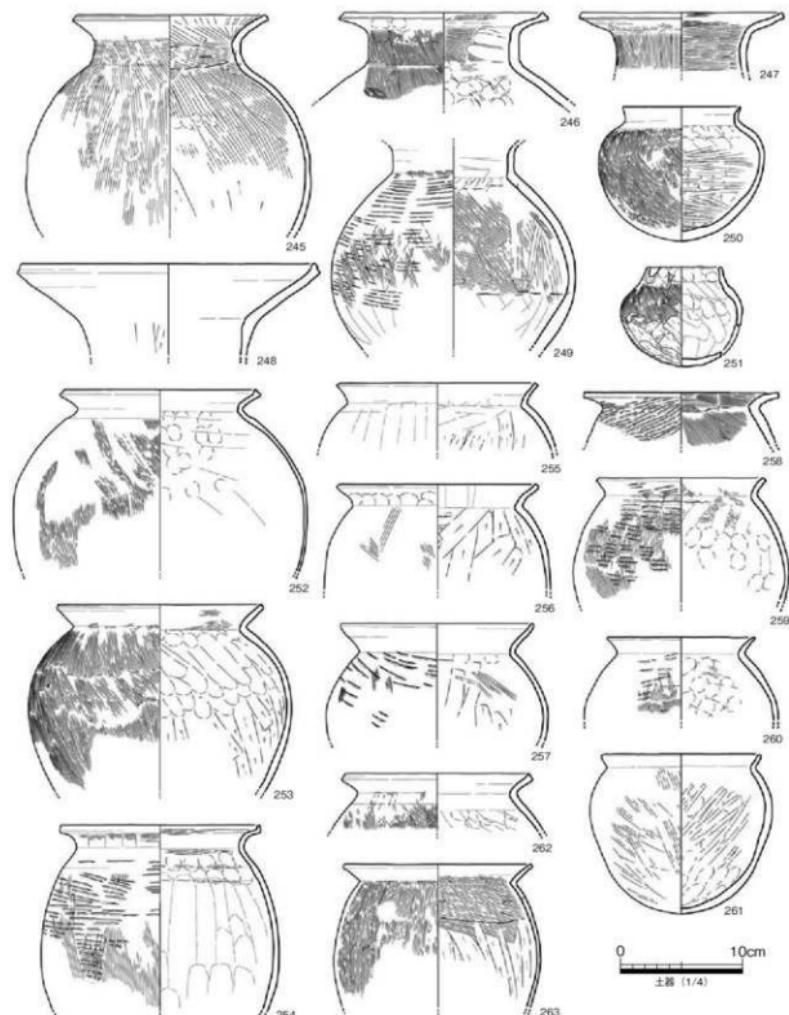
断面V字形状を呈すSR01（第15図3～18層）は西肩のSR02（19～26層）とともにその上半を掘削し、SR01上層として遺物を取り上げた。そのためSR02の出土遺物の大半がSR01として取り上げられている。さらにSR01下層・最下層として掘り下げた層位から斎串等の木製品が出土し、その時点で



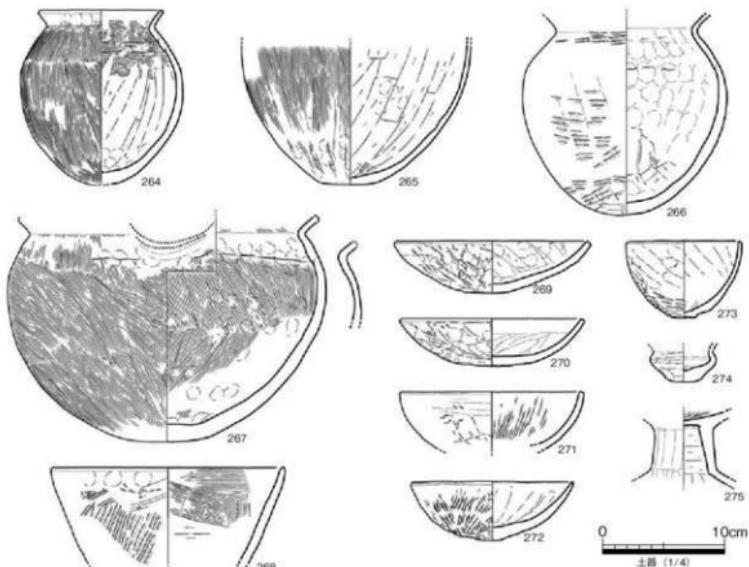
第59図 VII区 SR01・SR02 出土遺物実測図4

層位関係を把握したが、その時にはSR02堆積層はすでに掘りあがっていた。そのためここでは両河川出土遺物を基本的には一括して取り扱い、明確な遺物のみ出土層位の説明を加える。

160～186は弥生土器である。160～166は壺で160～163が広口壺、164が小型丸底壺、165・166は壺底部である。167～176は弥生土器甕である。下川津B類系の壺(167～171)と叩き成形の甕(172～176)がある。177～180は弥生土器鉢である。177・179は丸底で直口のタイプ。178は口縁部が僅かに屈曲し外上方に摘み出すタイプ。180は口縁が「く」の字に屈曲するタイプである。181・182はミニチュア鉢である。183～186は弥生土器高杯である。口縁部2点はいずれも下川津b類系の高杯。187～213は古墳時代の土師器である。187～193は高杯で口縁部形態は多様である。195～201は甕である。器面調整に板状工具または柔軟体の工具によるナデ調整を多用する。201は口縁部が二重に立ち上がり



第60図 VII区 SR01 出土遺物実測図1



第61図 VII区 SR01 出土遺物実測図2

外面に刷毛を施す吉備系壺である。202は口縁部が短く屈曲する鉢、203～206は丸底で直口の鉢である。207～212は壺である。208は中折れして口縁部が水平に広がる形態、211はラッパ状に口縁部が開き端部を押張しないものである。212は頸部が直立し明確な粘度接合痕を介して口縁部に接続し斜め方向に直線的に開く形態の壺である。それ以外の3点はラッパ状に口縁部が開き端部を押張して端面を窪ませる形態を呈す。213はミニチュア壺である。214は古代の土師器皿である。内面は赤色顔料の痕跡が顯著だが、外面はかろうじて痕跡がある程度である。215～238は須恵器である。SR01下層として取り上げられたものが多い。215～223は杯蓋である。224～235は杯、236・237は皿、238は壺の口縁部で外面に樹脂波状文を施す。

239～244はSR01下層（最下層か）出土の木製品である。239は斎串である。針葉樹の板目材を使用する。頭部を三角に成形し両端に切り込みを1か所ずつ入れる。下端は尖らせる。240はモミ属の柾目材で頭部は三角形に成形し上半の左右両側削り込みが入る。斎串に似ているが柾目材を使用することから懷疑的である。241はヘラ状木製品である。ヒノキの板目材を使用し下端をヘラ状に薄く成形する。242はアスナロの柾目材を使用した削り込み入りの棒状木製品である。上端部をやや丸く成形したように見える。243はヒノキ柾目材の板状木製品である。建築材か。244はコウヤマキ製の板目の木製品である。上端に釘穴を穿つ。曲げ物側板かもしれない。いずれも赤外線観察を行ったが、墨書等は認められなかった。

以上のVII区 SR01・SR02は弥生時代後期後半古相から古墳時代前期まで存続した後、8世紀から9世